
Oh ! My God !

蒼緋溯乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Oh! My God!

【Nコード】

N7207C

【作者名】

蒼緋溯乃

【あらすじ】

全世界を統治する女神達。その一人の元へ、小さな少女から願いが届いた。果たして願いは叶えられるのか…？

プロローグ

幼稚園生くらいだろうか。お風呂上がりであろう女の子が、絵本を持ってきて母親に読むよう頼んでいる。

娘を優しく膝に乗せた母親は、微笑みながら包み込むような声で読み始めた。それを横で見ていた父親の表情もほころび、空気がふんわり温かくなる。

今ではもう珍しいブラウン管型のテレビが次のニュースを告げた。画面いっぱいには伐り倒される山、森林が映される。

「酷いことを……」

「開発のためとはいえ、あまり良いニュースとは言えないな」

突然絵本が止んだので、女の子も少し体を伸ばし不思議そうにテレビを見つめる。

伐り倒される木々と、跡地に立てられるニュータウンのイメージ映像が交互に映し出され、現地を取材中のリポーターもどこか得意げだ。

その倒されていく木々が気になるのか、女の子は目を画面から離さずに母親の膝から降りてテレビへ歩み寄った。

「ママ、なんできはきられてるの？ なにかわるいことしたの？」

「いいえ、何もしてないわ。木は何も悪くないのよ」

なおも倒れる木を映す画面を、その小さな手で叩いた。ぺち、ぺち、と吸い付くような音がする。

「じゃあなんできられちゃうの？」

「それはね……」

「あたしがいいこにしてたら、きられない？」

「……どうしてだい？」

「だって」

両親のほうへ向き直りながら、女の子はその顔を歪ませた。本来くりっとしているはずの大きな瞳からは大粒の涙がいくつも零れ落

ちる。

「だって、かわいそう」

途端にわあぁと泣き出した女の子は、母親のもとへと駆け寄った。泣きじゃくる娘を抱きしめながら、ふと両親は思う。

幼い彼女には理解し難いものが、この世界には多すぎる。それをこれから先どう伝えればいいと言うのだろう。世の中が言うように、いつか自然に分かる日が来るかもしれない。しかし、それで本当にいいのだろうか。

今、我が子がぶつかっているこの大きな壁は、もったときちんと伝えなければならぬことのはずだ。

「それじゃあ、神様をお願いをしようか」

「かみさま？」

「そうだよ。神様に『木を伐らないで』ってお願いすれば、きっと神様も木を伐れないようにしてくださるよ」

「ほんと？」

「ああ、もちろんだとも」

ぱあぁと表情の明るくなった娘は、嬉しそうに母親の膝から降りて大きな窓から外を見た。

丸い月の輝く夜空には、沢山の数え切れない星が光り輝いている。

「かみさま、おねがいです」

これ以上、木を伐らないで。

第1輪：小さな願い

青く澄んだ空の下に広がる草原は、あたり一面に様々な花をつけていた。その周辺を蝶が飛びまわり、小鳥たちがさえずる姿も見られる。木が生えているところでは、その幹からリスなんかも顔を見せた。所々に見える美しい水面には、ゆったりと雲が流れている。

まさに楽園と呼ぶべきその中に、その花は咲いていた。

中央がスマイレ色、そこから淡く色合いが変わって、花びらの先は薄桃色に染まっているという、何とも珍しい花。沢山の花の中でもその一輪だけは、どこか格別な雰囲気があった。

風に揺れたその花を、細く美しい指がそっと包み込んだ。優しく愛でるように、指先でそっと撫でる。

その美しい指の持ち主は、微笑んでから立ち上がった。どこまでも広がる遠い空を翔ける風が、彼女の美しい髪で遊んでいく。やや青みがかかった腰ほどまである銀髪が、柔らかく、軽く舞う。

「こちらにいらしたのですか」

不意に声をかけられて振り向くと、顔立ちがまるで同じの女性が一人。瞳の、髪の色さえも二人は同じだった。

違うことと言えば、一人は髪を束ねていること。それから、一人は髪に大きな花飾りのようなものがあることくらいだ。

「今日は皆機嫌がいいの。……そう、みて？ セルパティオが咲いたのよ」

穏やかな口調の女性は嬉しそうにそう言ってしゃがみ込み、再度あの花を撫でた。もう一人も少し驚いた様子だったが、ゆっくりと歩み寄る。

「セルパティオ……あの、神羅界暦で約七百年以上前に絶滅が確認された、幻里界の植物ですか？」

「正確には八百三十四年前よ、サラ。……この間、資料館でセルパティオの種子の構築要素の資料を見つけたの。古代アルソア語で書

かれていたから、解読に予想以上の時間がかかったんだけど。もし再現できたら素敵でしょう？ 良かったわ、上手くいって」

後から来た女性――サラが、少し身をかがめてセルパティオに微笑んでいたのを起こし、思い出したように尋ねる。

「しかし、セルパティオの生息には、この上なく澄んだ水と、生まれたばかりの新鮮な空気が必要なのでは？」

「ええ。それも色々考えたのだけど、ウィルとアクアに無理言って手伝っていたいたいの」

「なるほど。それこそ申し分ない、極上の水と空気が手に入りますものね」

「おかげで、やっと一輪咲いてくれたのよ。このまま増えてくれたら、幻里界にも戻せる日が来るわ」

立ち上がって微笑むと、自分にそっくりな彼女の持つものに気がついた。いくつかの書類と、淡く光る砂時計のようなもの。思い出して、サラが手渡す。上部には、彼女たちの言葉である聖羅語で何かが書かれている。

「つい、先程。人間界の地球区からです」

「あら、人間界から？ 何かしら」

聖羅語の部分を丸くなぞりながらある言葉を呟くと、反応した光に包まれた球体のようなものが浮かんできた。それはゆっくり彼女の顔の高さまで上がると、小さな女の子の大きな願いを伝える。

小さいけれど、彼女がこめた願いは強い。

途端にその光も願いも愛しくなって、そっと手のひらに包み込んだ。嬉しくて仕方なくて、笑みがこぼれる。

「…それじゃあ、仕事に戻らないといけないわね。お嬢さんが待ってるもの」

しばらくしてから顔を上げ、そう言った彼女は、サラと穏やかな微笑みと微笑みを交わすと、広い草原を並んで歩いていった。どちらの表情も嬉しそうで、二人の髪をまた風が遊んでいく。

やがて見えてきたのは、いかにも神話に出てきそうな神秘的な建

物だった。

大きな扉を開けて入ると、中はとてつもなく大きな聖堂のようだった。白い石のみで造られたこの城の天井は分らないほど高く、どのくらい広いか表現できないほど広い。その中を行く人々は、二人が入ってきたのを見ると手を止め、頭を下げた。

「お帰りなさいませ、セリア様、サラ様」

足音がよく響く石造りの上を進んでいると、一人の女性が声をかけてきた。覚えている、この短い金髪は確か…。

「…ツエラ？」

「覚えていてくださって光栄です、セリア様。昨日お目にかかったばかりですのに」

彼女は、昨日新しく来た者だった。道に迷っていたのを、セリアが助けてあげたのだ。

「昨日は、大変ご迷惑をおかけいたしました」

「いいのよ、初めは皆そうだもの。もうすべて覚えて？」

「おかげさまで、不自由しない程度には」

「追々覚えていけばいいのよ。私だって、時々通路を間違えるもの。…ああ、こちらはサラ。私の妹なの」

セリアに一礼してからサラのほうへ体を向け、深く頭を下げた。切りそろえられた金髪が、つられて前に傾く。

「初めてお目にかかります、サラ様。昨日より仕えさせていただいております、ツエルエラ・ヴィリオンと申します。どうぞツエラとお呼びください」

「有難うございます、ツエラ。これからお世話になります」

「こちらこそ、どうぞサラ様、お言葉を崩してください」

サラの丁寧な言葉に驚いて、ツエラは恐縮そうな顔をした。いつものことだが、セリアが苦笑して説明する。

「サラはいつもこうなの。誰に対してもね。だから、何も気にすることは無いのよ、ツエラ」

そうでしたか、とツエラは安心したようだったが、すぐに何かを思い出したのか、気まずそうな顔をする。そしておずおずと遠慮がちに話を切り出した。

「セリア様、身分もわきまえず申し訳ないのですが、お願いしたいことがございまして」

「あら、何なのツエラ。気にせず言って御覧なさい」

「では、お言葉に甘えまして……」

一礼してツエラが振り向くと、一人の女の子が走ってくる。こげ茶の髪を二つに結った、おそらく人間の子供だ。

「先程、迷い込んでしまったようなのです。ですが、私にはどうにもできず……」

「分かりました、この子は私が預かりましょう」

「恐れ入ります」

子供の目線の高さまでしゃがみ込んで、微笑みかける。すると子供も無邪気に、笑った。

「ようこそ、神々の世界へ」

その力で心を癒し、幸せを与えることがお前に託された使命なのだよ。

そう言葉を頂いたのは、気の遠くなるほど昔の話だ。

小さな女の子は『あかり』と名乗り、セリアの左手と手をつないでいる。あかりの希望で、ここがどこかを教えてあげながら城の中を散歩しているのだ。

「あかりちゃんは、お空を見るわね？」

「みる！」

「お花も見るわね？」

「みる！」

「お星様も」

「みる！」

楽しそうなその声に微笑みながら、幼い彼女にも分かるように、どう説明しようか考える。が、それもすぐ止めた。

子供は素直だ。ありのままを話しても、受け入れられる素直な心を持っている。

「それならねえ……そのお空と、お花と、お星様は誰が作ってると思う？」

「んーと……」

首を傾げてみたりして、実にかわいらしい。

「あ、かみさま！」

「その通りよ。他にも、風とか、お水とかも全部神様が作ってるの。それを、あかりちゃん達はいつも使っているのよ」

「そうなんだあ……！」

「あかりちゃんは、お母さんとお父さんはどうしたの？」

「……わかんない。おとうさんと、おかあさんと、おくるまにのってたらね、がっしょんっておとがしてね、ここにいたの」

「そうなの……」

右隣にいたサラを向くと、会話で察してくれていたのか既にそこにはいなかった。

この小さな女の子は、ただの迷子じゃない。

「それで、かみさまはどこにすんでるの？」

「神様はね、あかりちゃんが今歩いている、このお城に住んでるのよ」

「ええっ！ あかり、あいたい！」

目をキラキラさせるその位置までしゃがみ、優しく微笑んだ。

「神様は……あかりちゃんの、目の前にいるわ」

「おねえちゃん、かみさまなのっ？」

信じられないのか興奮しているのか、それとも両方なのか。ぴょんぴょん飛び跳ねるのを見て、思わず、くすくすと笑い声がこぼれた。

「そう。私は、お花を作る神様なのよ」

「……あかり！」

「おかあさん！」

ぱたぱたと母親のもとへ駆けていく彼女を見ながらゆっくり立ち上がると、母親の後ろにサラと案内人が見えた。

何度も何度も娘を強く抱きしめてから、母親がこっちへ深く頭を下げる。後ろの案内人も軽く頭を下げた。

「親子三人、交通事故だったんです。ところが、いざ霊界に着いてみると娘だけがない。どうやら、時空のひずみに巻き込まれたよううで」

「そう……」

「お手数をおかけしました」

その命を終えた者は、霊界で審判を受ける。と言っても、犯罪人でなければ簡単な身分照合で、一般的に「天国」と呼ばれている天界へ行くことが出来るのだ。どうやら彼女は、人間界から霊界へ移動する途中に行方不明になったらしかった。

「何のお話をされていたのです？ あの子、随分嬉しそうでしたが」母親と会えて嬉しそうな笑顔を見て、また笑みがこぼれる。

「本当のこと、よ」

「神様って、知られていないものなのね」

この世界のその全てには、必ず女神の力が働いている。彼女たちは何千：何万という世界の全てを陰ながら支え、管理しているのだ。彼女らの一人が言うには、「世界」というものは、どちらかと言えば「空間」であり、それらは限られたものしか通ることが出来ない通路のようなもので網の目よりも細かく繋がっているらしい。その中に人間界も霊界も魔界も全てが含まれていて、そんな大きな塊の中央に位置する彼女たち神族の世界、「神羅界」もその一つだという。

神羅界は「神王」と呼ばれる神族唯一の男神のもとに成り立ち、神族の子供は一定の間隔で光に包まれて生まれてくる。その後、一定の成長を終えるまでは女神の中から「親」が選ばれ、そのもとで育てられる。

しかし生まれてきた全員が女神になるわけではなく、その中で他の世界に望まれる力を手にして生まれてきた子供だけが女神とされる。しかし多くの場合、既にその力を持つ女神が存在するため、そのもとで自らの力を使う従者神族となるのだ。女神が引退すれば、その女神に仕えていた従者神族の中から神王によって再び女神が選ばれる。

女神たちはそれぞれ自分の城を持っているが、その長い生涯の殆どを神羅界の中枢―即ち、存在する全ての源といえる城、「夢幻城」で過ごす。休暇よりも、全ての世界の幸せのために尽くすことのほうが、彼女等には何倍も魅力的なのだという。

また、神族には双子が多い。何故なら、彼女らの持つ力、即ちこの世の全ては必ず別の何かと対になっているからだ。光なら闇、太陽なら月といった風に。

極まれに一人で生まれてくるものもいるが、その数は非常に限られていて、現在は「色」を司る女神しか確認されていない。

「さて、仕事に戻りましょうか」

先程から温かい微笑みと穏やかな口調で周囲を和ませているのは、「花」を司る神であるセリア・アイオニス。青みがかった長く美しい銀髪と、前頭の左側に生まれつき持つ花飾りのようなものが特徴で、本人曰くこれは体の一部らしい。

いつでも冷静沈着で滅多に表情を崩さないセリアの双子の妹、サラ・アイオニスは「星」を司る神だ。長い青みがかった銀髪を後ろで束ねていて、誰に対しても丁寧な話し方をする。

二人は年齢こそ四千歳を超えているが、見た目はわずか十八歳。これは、神族の肉体が二百五十年ごとにしか年をとらないことによるものだ。また、神羅界の時間が他の世界の二百五十分の一の速さで進むため、都合上、時間の換算基準を他の世界にあわせていることにも関係すると思われる。つまり、本来の神羅界の一年は他の世界の二百五十年に相当するのだ。原因として、神羅界が生まれたとき、下界から守るために作られたという伝承がある、神羅界の周りの時空のひずみが挙げられている。

一般に女神となる神族の子供が活躍を始めるのは、肉体年齢にして満十五歳からと定められている。しかしセリアたちは、親の立場の為、わずか満十歳のころから女神として活躍していた。

彼女たちの親は、他ならぬ神王なのだ。女神の活躍のおかげで暇が増えた神王は、自ら親を名乗り出ることもあった。

案内人に後を任せて執務室へ続く廊下を歩いていた二人は、向こうのほうから慌てる足音を聞いた。顔が見えたのは、セリアに仕えているうちの一人だ。足音に同じく、どうも焦っているらしい。

「セリア様、サラ様！ どちらへ行かれていたのです？ もう定例議会のお時間ですよ！」

微笑んでいたはずの二人の女神の表情は、見る見るうちに青ざめた。

「…なるほど。遅刻の理由は分かりました。席について構わないわ」
「申し訳ありませんでした」

円形になっている会議室の一番奥に座っている議長、「源」を司る神であるヴィオード・オリジンの言葉で、セリアとサラは席に着いた。今日は月に一度の定例議会だったのに！ すっかり忘れてしまっていたサラは自分を責めていたが、セリアは何とものんびりしていて、笑顔で席についていた。

スミレ色の、背ほどまで（普通腰まで伸ばす神族にしては短めなほうだ）の髪が、ヴィオードの動きと共に揺れた。

「では、会議を始めたいと思います。何か、新しく願いが届いた方は？」

定例会議では、女神たちに寄せられた願いを叶える為に、各女神のする事を決めていく。

たとえば、「桜の木がもっと欲しい」という願いがセリアの元に届き、セリアが桜の木を増やそうと思ったら、その世界の色のバランスが変わるので、「色」の女神に調整をお願いする必要がある。また、十分に成長できるように、水を統べる「海」の女神にもお願いしなくてはならない。もし人間界で桜の木が枯れてしまったら、調整が上手くいかなかったということだ。

だが、寄せられる願いの中には『とても無理だ』と言う理由で破棄処分されてしまうものもあるし、『現段階では無理だが、いつか出来るようになる日が来るかもしれない』と判断されて保留庫にしまわれるものもある。定例議会とは、その判断をするところでもあるのだ。

先程届いた願いを思い出し、セリアが手を上げた。

「何、セリア？」

先程届いたばかりなのだけれど、と前置きをして、右手のひらをくると返した。光が浮かび、小さな女の子の声をする。

『これいじょう、きをきらないで』

球体から発せられるその愛しい願いに、どの女神の顔もほころんでいる。

「いったい、どこからなの？」

「人間界、地球区よ」

人間界。そう聞いたとたん、微笑んでいたはずの女神たちの表情は一変した。

「お止めなさい、セリア。いくら私たち女神の使命が『すべての世界を幸せにすること』だとしても、あの世界はもう我々の手には負えないわ」

「……ちよつと、ヴィオード。どうしたというの？」

信じられないヴィオードの言葉に困惑していると、美しい青色の長髪が動いた。セルパティオの再現に協力してくれた、水全般を統べる「海」を司る神のアクア・マールキュアが立ち上がったのだ。

その瞳は、まっすぐにセリアを見つめている。

「私もヴィオードの意見に賛成する。人間は、自らの手で自らの首を絞める愚かな生き物。現に私の管轄である海も、彼らに汚染されている」

「もちろん、海だけじゃないわ」

明るい橙色の髪を女神にしては短めに伸ばした「太陽」を司る神、サニー・ウェイスト。通称サンウェストも立ち上がる。

「空も、大気も、彼らを支える自然全てがそうなのよ。それに、木の数を減らしているのは私たち女神ではなく、人間そのものじゃないの。彼らが木を伐り倒す所為で、我々が定めている地球の環境バランスや色バランスが大きく崩れていることも。セリア、あなた十分知っているでしょう？」

「…最早、あの世界に我々女神は必要ないということかもしれないよ」

「そんな：皆ちょっと待って！」

緑色の髪を高い位置でまとめて下ろしている「戦」を司る神、ウオーラ・ワーストまでもが座ったまま呟くようにそう言った。彼女達の信じられない言葉に、セリアは思わず身を乗り出す。

「さつきから皆何を言っているの？ それじゃあ、人間界から来た願いを捨てると言うの？ 助けを求めているこの子を、見捨てるっていうの？」

「落ち着きなさい、セリア。誰もそんなことは言っていないわ。ただ、その願いを聞き入れることは出来ないって言うただけじゃないの」

「結局同じことでしょう？ 私たちは女神なのよ。すべての世界を幸せにするのが仕事じゃないの？」

「人間界は他の世界とは違う！」

アクアの強い声で皆が静まった。それを気にすることなく、彼女は続ける。

「他の世界は、どの世界も皆自然のリズムを壊すことなく成り立っている！ 現に、人間界が誕生する何倍も前から存在する世界はいくつもあるが、そのどれもが発生当時の環境を保っている。人間界……特に地球区は、人間という生物が誕生してから著しい速度で環境が変わっているのだ！ 我々がいくら手助けしようとも、人間の破壊速度には追いつけない。さつきウオーラが言っていたように、最早あの世界に我々女神の力は必要ない！」

「そんなことはないわ。人間界を支配しているのは大人で、願いを寄せたのは幼い少女だもの。これからの人間界を支える子供が願っているのよ？」

「セリアの言いたいことは分かるわ。でもそれなら、逆に放っておいたほうがいいんじゃないかしら。私たちが今助けなかったら、その子は早く大人になって自分で取り組もうと考えるでしょう。そうして彼女たちが自分たちの未来を作っていけばいいわ。もう私たちが出る幕じゃないのよ」

「違うわサンウェスト。それは私たちが逃げてることにしかならない！ 彼女は助けを求めてきたわ、私たちが必要なのよ。私たち女神には、どの世界も、どの願いも平等に扱う責任があるの！」

「私も同意見です。そんな理由で破棄処分など…認められません」
激しい議論が繰り交わされる中、ヴィオードは潮時を感じていた。セリアは絶対に引かないだろうし、穏やかな口調こそ変わっていないが、隣に座っているサラもまた同じだ。このまま願いを破棄処分にすれば、一体どうなるか。長年議長の座にいる彼女には分かっていた。

「静かに」

ヴィオードが口を開いて、口々に話していたのが止み、各々の席に着いて、彼女の言葉を待つ。

「…セリアには悪いけど、今の願いは、保留庫に回しましょう。今はまだ、ハッキリと結論が出るときではないわ」

「ヴィオード！」

「分かって、セリア。もう私たちは人間に振り回されるのに疲れたのよ」

その辛そうな声に、セリアもサラも何も言えなくなる。他の女神たちも、ヴィオードの出した案に賛成するばかりだった。

「……他に、何か願いは？」

議長は会議を続けようと声をかけるが、もう誰かが何を言う雰囲気ではない。

「いないのね…では、今日は解散。セリア！」

席を立つセリアのもとへ、ヴィオードは駆け寄った。この落胆した表情に追い討ちをかけるようなことを、自分はしなければならぬ。

「願いを」

議会の決議は絶対だ。一瞬ためらって、セリアは願いを渡してしまった。

執務室に戻っても、セリアの顔色は曇ったままだった。同じ執務室に勤務するサラもまた、落胆を隠しきれない。

今頃、あの願いは保留庫に保管されているだろう。いくつもの願いが保管されていくのを見たが、あそこから出されて実際に叶えられた願いは見たことがない。それを思い出して、思わずため息が出る。

『これいじょう、きをきらないで』

自分の無力さに、セリアは心の中で女の子に謝った。

第2輪：吉報

「セリア様、吉報ですよ！」

そんな声が執務室に響いたのは、何週間かが経ってからだった。飛び込んできたその神族は、息をきらしながらも持っている書類を振った。サラが持ってきた水を一礼してから一気に飲み干し、また一礼してから返すが、その表情は疲れなど見せず嬉々としていた。

「一体どうしたの？」

「はい！ たった今、『神羅界 能力学問研究会』よりペガサス便が届きまして、セリア様の提出した『セルパティオ再現記録』が、学会で高い評価を得たとのことです！ 更に、その評価の高さから、今度、緊急学会を開いて表彰式を行うそうです！」

「何ですって！」

セリアとサラ、そこにいた神族全てが彼女の周りを取り囲む。中には喜びのあまり抱き合う神族も見られた。はやる気持ちを抑えようとしながらも、受賞者本人よりもサラのほうが詳細を知らずにいられないようだ。

「それはどういうことです？」

「はい！ この間セリア様が再現されたセルパティオを幻里界で試験移植したところ、見事に繁殖を始めたそうです。書類には、『セルパティオが再び幻里界に生息したことで、幻里界の人々は希望を手にした。セルパティオに関する資料は失われた言葉、古代アルソア語で書かれていたにも関わらず、それを解読し、見事に再現した能力は高く評価されるべきものである。よって、ここにセリア・アイオニス発表「セルパティオ再現記録」の表彰を決定する』とあります！」

「表彰式だなんて……！ おめでとうございます、セリア様！」

「お姉様、おめでとうございます」

「皆有難う。でもどうでしょう、全然信じられないわ……！ ね

え、書類をよく見せて」

何度も何度も読み直すが、聞き間違いではないらしい。審査基準の厳しい学会で表彰を受けることなど滅多にないため、その思いがけない吉報に、アイオニスの執務室は大いに沸いた。

もちろん、定例会議もその話題でもちきりだった。二人が会議室に入ると、祝福の声があらこちらから降り注いだのだ。

「おめでとう、セリア。私たちの誇りよ」

最初に駆け寄ってきたのは、金色の髪を持つサンウェストの妹、「月」を司る神であるムーリアだった。続いて、ウォーラやヴィオードなど、他の女神たちも次々にやってくる。

「本当におめでとう。協力した甲斐があったってものね」

「ウィル…ありがとう」

中でも、協力してくれた「風」を司る神、ウィルからの祝福は、よりセリアを嬉しくさせた。以前、セリアの持ち出した願いに反対していたアクアも、微笑んで手を握ってくれた。

「それで、スピーチの内容は決めたの？」

「スピーチ？」

「表彰式で行うのですか？」

突然のヴィオードの言葉にセリアとサラは驚いたが、二人が驚いたことにまた他の女神たちが驚いていた。セリアたちは表彰式に出たことがなかったものね。と、「空」を司る神であるセレッシャル・リイリア、通称セレシアが言う。

「学会で表彰された者は、表彰式でスピーチをすることになってるの。表彰された記録のことでもいいし、もちろん別のことでも、何でも構わないわ。どちらにしろ、学会表彰式でのスピーチだもの。とびきりの書かないと、受賞を取り消されるかもしれないわよ？」

そんな馬鹿なことはないわよ、と、いつもの冗談をウィルがフォローする。綺麗な空色の髪を持つセレシアは、こんな冗談が大好きだった。

「表彰式は三カ月後だったかしら。内容が決まったら、また教えてね」

表彰されるだけでもとんでもないことなのに、その表彰式にスピーチまであったとは。考えてもいないことだった。

愛用の羽ペンで紙に書きとめていくが、途中でまとまらず丸めてみる。しかしこのまま捨てては勿体ないので、再び広げて余白に書く……。かれこれ一時間近く、セリアは同じことを繰り返していた。「スピーチの内容が決まらないのですか？」

見るに見かねて、サラがセリアのもとへやってくる。

「ああ、ごめんなさいね、邪魔をしてしまって」

「いえ、それは構いませんが」

「何を話せばいいか、分からないのよ」

何しろ、学会の表彰式には神羅界の神族の殆どが出席する。だからこそ、表彰されることは素晴らしいことで、名誉なことなのだ。しかし、セレシアの言う通り、そんな場でスピーチをするとなればそれはまた別の話で、「決して変なこととは言えない」という威圧感が受賞者を襲うこともあり、実際、学会が受賞を取り消したことは無かったが、受賞を辞退した者は何人もいた。

丸めた紙のしわを伸ばしながら、受賞したのは嬉しいのだけだとこぼす。黙っていたサラが、考え付いたように提案した。

「この間の、願いは如何でしょう？ 定例議会で保留庫行きになった、あの願いです」

セリアの脳裏に、あの女の子の声が蘇る。

『これいじょう、きをきらないで』

「…それはいい考えかもしれないわね。神羅界の殆どの人が見に来

るんですもの、そこで多くの賛成意見を貰えば、定例議会だって認めないわけにはいかないわ。……流石ね、サラ。どうも有難う！」

「いえ！ 妹として、姉が表彰を受けるなんて嬉しいことですもの。……では、早速調査にかかりましょう」

「あら、手伝ってくれるの？」

「もちろんです。まず、木の減少具合から調べなくては……情報館で下調べをして、それから下界に降りましょう」

「待って」

引き出しから必要な書類を捜すサラに、セリアがストップをかける。やっぱり、落ち着いて考えましょう。と声をかけた。

「この願いは、一度議会で保留庫行きになっているのよ。保留庫に送られた願いの無断調査はご法度。もし気付かれたら、受賞どころじゃなくなってしまう。そうなれば、あの子の願いは二度と表に出ないことになるわ」

「……では、どうします？」

しばらく考えた後、セリアは決心した。

私は神だ。すべての世界の人々を幸せにする責任がある。

そしてその力が、自分には託されているのだ。

暗い廊下に、足音が響き渡る。空気がひんやりとされていて心地よい。ランプの光が暗闇を怪しげに照らし、それを頼りに二人は進んでいた。目指す情報館は資料館の隣にあり、城の中ではちょうど二人の執務室と反対の方向にある。

城を動く神族の少ない夜ならば、気付かれなくてもいい。そんなセリアの考えで、行動は夜に移された。夜は動いてはいけないという規則など無い。しかし、動く神族が少ないということは、それだけ響く音も少ないということ。気をつけていないと、足音が響いて誰かが来てしまう。

それでも途中、何人かの深夜勤務の神族と出くわしたが、幸いにも誰も何も聞いてこなかった。

「着いたわ」

そつと鍵を差し込み、捻る。がちやり、と大きな音がした。誰も気付いていないか、慌てて周囲をチェックする。資料館の位置が幸いしているのか、やはり時間帯が良かったのか、広い城の端に人影は無い。

それでも用心に越したことは無いと、扉を開けるのも一苦労だった。キィ、という音が立つ度に辺りを見回した。昼間堂々と来たほうが楽だったのではないかと、今更ながらに思ったりもする。

中に入ってしまったばこっちのものだ。中央の机にランプを置き、早速情報箱で検索を始める。あの女の子の願いは、一体どういうことだったのか。

「出ました」

結果を先に導き出したのはサラだった。機械や書類の扱いなら、彼女のほうが数段上手のようだ。

「本当に助かるわ。こっちにも送ってくれないかしら」

感情が無いものって苦手なのよね。何よりも自然と触れ合うのが好きな女神は、苦笑して呟く。それを聞いてサラは何故か安心した。すぐにセリアのほうにも情報が送られ、それらを一つ一つチェックする。画面にはいくつもの見出しが並んでいた。『本当に存在した！ 牛とツチノコの合成獣』『新宿と原宿どっちが有利？』『月のカラスがもちをつく理由』……。

一体サラは何を探していたのだろう。

「まあ、御覧なさいサラ！ 頭が牛で体がツチノコの新種が見つかったそうよ！ 一体どんな生き物なのかしら……」

「頭がツチノコで体が牛では？ それと新種ではなく合成獣です」

「あらそうなの？ 間違った情報があるものね…注意しないとだまされてしまうわ」

どうやら、ツチノコという生物の存在自体が確認されていないこと

は載っていないらしい。

「でもサラ、月にいるカラスが毎日月を食べるから満ち欠けが起きるんですって！なるほどね、食べてしまったのがバレてしまったら困るもの。だから彼らは満月に戻す為にもちについて、出来たもちを月に塗りつけていたんだわ」

「お姉様、月にいるのはカラスでなくオオカミですよ。オオカミが月を食べ、もちをつくことによって満ち欠けが発生するのです」

「あら、これも間違いだったの？私ったら信じてしまったわ」

「予想よりも多く偽情報が紛れているようです、注意しましょう」
星を操り星座を作ったり、新たな星や惑星を生み出す能力を持ち、月を作り出した張本人でもある「星」を司る女神はそう言った。

確かに偽情報ではあるが、月にいるのはカラスだという点だけではなく、満ち欠けの原因もそうだという事に気付かなければいけない。オオカミが月と太陽を追いかけるのは北欧神話の中だけだ。

そんなどうでもいい見出しが溢れる部分を通り過ぎると、ようやくお目当ての言葉が目に入った。『人間界・地球区における自然環境問題』。

今度こそ間違いはなさそうだ。

「ええっと：『昨今の地球区における環境の悪化には目を見張るものがある：』」

中でもオゾン層の破壊、海洋汚染、地球温暖化、砂漠化といった主な環境変化。これを生み出したのは自然の恩恵により育ったはずの人間である。彼らは自らの発展を望むがために多くの自然・生物・果てには同胞の命を奪い合い、発展を築くどころか自らの首を絞め続けている。それにも拘らず、未だ数多くの木々を伐り倒し、動物たちの住処を奪って自らの住処を作っておきながら、その所為で起こる自然災害に文句を言い、農業の為に森を焼き払ってそのまま植樹もせず放っておいたために砂漠が延々と広がったというのに、まるで被害者かのようにそれを嘆き、更には大量の汚染物質を海や川へ流して魚たちを殺し、その魚を食べたがために同胞が死んだぞど

うしてくれると言う。決して住処を奪われた動物や焼かれた木々、殺された魚たちのことを想うことなどない。更に自らの利益を求め続けるその欲に限りはなく、女神の努力も空しく、人間の愚かな欲によって数多くの動物が絶滅させられた。その上、他の生物との共存など言いながら動物を見世物にする様など利己心の塊。神羅界の女神が陰で支えていることなど彼らには関係ないのだ。

「『人間の身勝手さにはほとほと呆れるものがあり、議会は地球抹消案について議論を重ねている……』ちょっと待って、何なのこの記事は？ また偽の情報なの？」

「残念ですが……」

サラも否定したい気持ちでいっぱいだが、情報の登録者の名前を見て、肯定せざるを得なくなる。

「登録者が、嘘を言える立場ではありません」

情報名『人間界・地球区における自然環境問題』

登録者…神王

第3輪：理想と現実

翌日、セリアは再び羽ペンと妙にしわの多い紙とにらめっこをしていた。正直、まだ頭は混乱している。昨日情報館で見た父なる存在、神王の登録した情報と、定例議会での女神たちの言葉がフラッシュバックする。

『人間は自らの手で自らの首を絞める愚かな生き物』

……そう言ったのはアクアだったろうか。あの情報が本当なら、彼女たちの発言は間違っていないことになる。

かといって、願いを破棄してもいいかどうかはまた別の話なのだが。

「本当、なのかしら……」

「見に行ってみましょう」

顔を上げると、頼りになる妹の姿があった。しかし彼女もまた、信じがたい事実に困惑しているのだろう、そんな表情をしていた。

「悩んでいても始まりません。下界に降りて、実際に見てみませんか」

彼女の言うことにも一理ある。実際に自分の目で確かめて、それから物事を判断するべきだ。父にも、そう教わった。

「でもね、サラ。下界に降りる理由がないの。理由がなければ、パスを発行してもらえないわ」

世界と世界をつなぐ通路には関所のようなものがあり、発行されたパスを提示しなければたとえ神王でも先には進めない。各世界を守る為、大昔に神王が発案して以来ずっと用いられてきたシステムだ。関所を無理に通れば、いくら女神でも重い罪を科せられる。

だが、それを突破して下界に降りてみない限り、この願いが叶わないこともまた事実だった。

「一体どうすればいいの……」

八方塞の状態に、セリアはすっかり力を落としている。そんな姉を見て、サラはどうしようか迷っていた。尊敬も出来るし、信頼も

おける双子の姉に、ひとつだけ隠していることがあった。

「実を申しますと」

法に触れず下界に降りる方法が全く無いわけではない。だが、この方法を口にするのは正直嫌だった。これを使うなら違反を犯した法がマシ、というできるなら使いたくない方法だ。

「ひとつだけ、法に触れず関所を通過して下界に降りる方法があります」

「本当なのサラ！」

方法を聞いたら今にも飛び出しそうな勢いでセリアが反応した。こんな反応をされたら、ますます気が引けてくる。再び、姉想いな妹はためらった。

「ですが……あまりお勧めできません」

「お勧めできないなんて……それは、そんなに危険な方法なの？」

「いえ、命の危険は全くありません。ただ……」

「ただ？」

妹からすれば、姉の命の危険と同じくらいの危険ではあった。

「厄介者が増えることになります」

おずおずと口にした妹の言葉の意味を、その時まだ姉は理解できなかった。

下を見ると、ちょうどイルカ達が大海原を移動しているところ。

広がる空もすれ違う風も気持ちがいいのだが、どうにも堪えきれない問題があった。

「確かに、以前来た時より環境は悪化しているわね……つくしゅ！
空気がとても埃臭かったのだ。」

「あの情報は間違っていないということでしょうか」

先に見える陸に向かって遙か上空を飛ぶ二人は、その環境の変化に驚いた。女神たちの言葉や情報箱にあった通り、地球の環境は急

激に悪化している。埃臭いのもそのひとつだが、大気が妙に不安定なのが気になった。

彼女たちが地球を訪れ、その自然の美しさに心打たれたのは、ついこの間のことだったのに。

「この状態では、例の砂漠化現象も気になりますね」

「一度、地球全体を見て回ってみましょう」

「おいおい、ちょっと待った。俺の仕事が先だろ？」

二人の後ろを飛んでいた男が二人の真ん中に割って入った。黒めの肌に、綺麗な漆黒の髪がよく映える。

「ええ、もちろんよカーネル。あなたのおかげでここまで来れたんですもの」

カーネルと呼ばれた若い年くらいの彼は、セリアの笑顔に得意げに鼻を鳴らした。

彼は神羅界の精霊地区に住む「雷」の精霊で、「雷」を司る神でありアクアの姉であるサンダー・マーキュアのもとで働いている。神族は神王をのぞく全員が女性であるのに対し、精霊族は精霊王をのぞく全員が男性だ。その他の神族と精霊族の違いは名前くらいだろう。神族はファーストネーム・セカンドネームであるのに対し、精霊族はファーストネーム・セカンドネーム・仕える女神のファーストネームが付く。精霊たちはその名前で持つ力の属性が分かるのだ。

「で、何でサラまでついて来てんだよ」

「同伴者は一名以上だったはずですよ。二人でも何ら問題はありません」

「いいじゃないのカーネル、旅は道連れ子は泣かせ、って言うじゃない」

「……旅は道連れ世は情けだろ。つか旅じゃねえし」

精霊が下界で仕事をする場合、一名以上の神族が同伴者として一緒に降りるという規則がある。普通、仕える者のもとで働く従者神族が同伴するのだが、女神や他の従者神族が同伴することもあった。

サラはそれを利用したのだ。

カーネルがセリアに熱烈に想いを寄せていることも幸いしたのだが、二人きりになった時がサラには心配だった。顔が悪いわけでも性格が悪いわけでもなく、どちらかと言えばカーネルは好青年の部類に入るので、姉の相手に相応しくないということではない。むしろ、彼の仕事に対する思いはサラも尊敬するほどだ。

ただセリアがそういうことにはとことん鈍く、カーネルの気持ちに全く気付いていないのだ。この同伴を好機会としてカーネルが迫ったとしたら、セリアには何のことか分からず、そのまま流されてしまいう可能性が非常に高い。かといって自分にも片付けなければならぬ仕事があるため、そう簡単についていくとは言えない。もし仮に自分の従者神族を付けても、簡単に丸め込まれてしまう可能性もある。出発を前にして悩んでいると、従者神族達が自分達に任せて言うてきてくれというので、その言葉に甘えて一緒に降りてきたのだ。当然、二人きりだと思っていたカーネルは機嫌が悪い。

「それで、仕事は何なのです？」

「ああ、何でも、雷龍達の様子がおかしいんだと。何か気に入らないことでもあったらしい」

雷龍とは、下界に住み、議会で定められたように天気とあわせて雷を操る龍のことで、その体は雷で出来ている、名の通りの雷龍だ。仕事以外では大人しく、とても神懐っこい生き物として知られている。

「本当、珍しいこともあるものね……あら、あれじゃない？」

セリアが指差す方向では、沢山の細い光が龍のように空を迸っていた。我を失っているのか普段の雷龍らしくなく、体から放電まで始めている。

そして、最悪の事態に気付いたのはサラだった。

「……いけない！ あそこは人間たちの住む街の上空です！」

「何だって！？ 悪い、先行くぜ！」

「あつ、ちょっと待って！」

セリアの声も届かず、カーネルは速度を何倍にも上げて雷龍へと向かっていった。もしも今落雷を起こしたりしたら……我を失っている状態での落雷には全く制御が利いていない。街に落ちでもしたら大惨事だ。それだけは絶対に避けねばならない。

「私たちも速度を上げましょう。何か出来ることがあるかもしれないわ」

「はい！」

既に遙か先を行く彼を追いかけ、二人も速度を上げていく。海上から陸に入ったところで、雷龍を宥めていたはずのカーネルが飛ばされてきた。

「カーネルっ!？」

「……っつ、あの馬鹿野郎が……っ！」

「カーネル！」

セリアが受け止めたのに礼も言わず、再び雷流のところへ向かっていく。それを気にしたのはサラだけだったが、サラもセリアも一瞬だがはつきりと見えた体の傷のほうに気になった。

雷で出来ている雷龍に飛ばされたのだ、触れたときに皮膚が感電したに違いない。腕や足などに焦げた跡が見られたし、頬からは血が流れていた。

慌てて後を追いかけると、カーネルの声も届かないほど暴走した雷龍達の姿があった。

「一体どうしたって言うんだよ！ 何があったのか、言えよ……っ」
何度も手を伸ばして雷の結界を放つが、暴走した雷龍には何の効果もない。その度に結界は壊され、術者である彼は飛ばされてしまう。

「……っぐ……畜生っ！ お前らどうしちゃったんだよっ！」

飛ばされても飛ばされても結界を放ちに行くカーネルを見て、セリアもサラも自分に出来ることはないか必死に考えた。人間を避難させるか、それとも、結界の上にもうひとつ結界を張ってみるか……。そして彼が再び飛ばされてきたとき、セリアはその前に静かに

立った。

後姿ではあったが、有無を言わせない威厳ある雰囲気には圧されてカーネルもその場に止まる。

「お姉様……？」

ゆっくりと雷龍に歩み寄ったセリアは、結界を張るでもなく、捕獲するでもなく、ただ雷龍の目をいつもの笑顔でじっと見つめていた。雷龍がその放電する尾でセリアの頬を打っても、遠くへ飛ばしても、また戻ってきて同じようにじっと目を見つめるのだ。体のあちこちが焦げ、頬や腕からは血が流れる。

「セリア！ ……あいつら本当にっ」

「来ないで！」

駆けつけようとしたカーネルに雷龍の目を見たまま叫ぶ。一瞬こわばった顔が、また笑顔になる。

「私に、任せて」

呟くようにそう言った後、一步、また一步と、ゆっくり雷龍に近づいていく。雷龍も威嚇するが、怖がりもしないセリアに少しずつ引き下がる。自分はこの子達の威嚇なんて何百回と見ている。

何も、怖くない。

「どうしたの？」

そのセリアの一言で、雷龍の体から出ていた放電が少しずつ治まっていく。そしてゆっくりと、セリアに近寄っていった。

「ほら……どうしたの？」

セリアが手を伸ばすと、いつものように髭を伸ばしてじゃれてくる。

もう、大丈夫だ。

「……セリア！」

「あら、カーネル。ほら、もう大丈夫。ね？」

まるで何のこともなかったかのように、駆け寄ってきたカーネルに笑顔で応えてから、雷龍を撫でてやった。自分が暴走していたなんて知らないかのように、気持ちよさそうにゴロゴロと音を鳴らし

たりなんかする。

「本当に助かったよ、有難う！ ……しかし、一体なんでこいつらは……」

「それなら、あれを」

セリアが顔を向けたのは、傷だらけの子猫を抱いたサラだった。毛が赤く染まっているということは血を流していたのだろうが、既にサラの神力で血は止まっている。

「何て酷いことを……！」

「さつき、何か出来ることはないかって考えていてね、ふと下を見たら目に入ったの。ほら、こんな大きな街の端に貧民街があるでしょう？ あそこで、飢えた子供たちに殺されかかっていたのよ」

「雷龍は、たまたま降りてきたところにそれを見たのでしょうか。既に動けないというのに、まだ暴行を繰り返していました」

「で、その子供は？」

滅多に無いサラの満面の笑みに貧民街を探すと、頭を抱えて転がりまわる子供が何人かいた。

「『弱いものをいじめるような卑怯なことは許しません。あなたたちに罰を与えます。』そう言って、この子が受けた痛みを分散させて与えてきました。ただの頭痛なのでそのうち止むでしょうが、これであの子達は二度と同じことはしないでしよう」

「何しろ、神様が現れたんですものね」

目の前の女神はくすくす笑っていたが、このメンバーの中で唯一の男である精霊は気を落としていた。本来なら、自分が二人を守らねばならない立場であるのに。

「雷龍達は暴行を見てしまって、他人を信じられなくなっていただけよ。もう大丈夫よね？」

セリアの問いかけに、高くゴロゴロとひと鳴きして雷龍は雲の陰に帰っていった。傷だらけのセリアも、子猫を抱いたサラも、ため息をつくカーネルも、その姿を温かく見守った。

「しかし、セリアは傷だらけになっちまった。本当に悪い！」

「あら、いいのよ、すぐ治るもの」

深く頭を下げたカーネルの体を起こし、セリアは笑顔でサラを見た。

「何も、ない……」

「どうして！？ この間来たときは、あんなに緑で溢れていたのに！」

傷の手当を終えて調査に移ったセリアたちが見たものは、広大に広がる砂漠だった。以前来たときの映像と今見ている映像とが、頭の中で交互に映る。かつて緑色一色だったその場所は、すっかり砂と埃の海になっていた。

「こいつは酷いや……こんなじゃ、水蒸気がないから雲も出来ないぜ」

「雲がないから雨が降らない、雨が降らないから植物が育たない、植物が育たず根がないから土は水を地表に留めない、水が地表にないから水分が蒸発しない、水分が蒸発しないから雲が出来ない……これじゃ悪循環です！」

「いくら人間が木を植えたって、これじゃ育たないわ。やっぱり、女神の力が必要なのよ」

でも。と、サラのおかげでいくら痛みの治まった腕を押さえながらカーネルが呟く。

「この状況を作り上げたのは人間達だぜ？ それに、地球を一回りしてみても気付いたことがある。多分、雷龍が暴れだした一番の原因はこれだ。猫も可哀相だったが、あれは引き金に過ぎない」

「……それは、一体何です？」

「空だ」

その言葉に二人とも空を見上げるが、特に目立っておかしい所はない。色も普通だし、空気が埃臭いこと意外は何も。

「感じなかったか？ 大気が妙に不安定なのを」

「ええ、それには気がついてたわ。でも、天気が変わる時には良

くあることだから、そう気にも留めなかったんだけど。それがどうしたの？」

地球に降りてきたときの妙な感覚を思い出しながら、彼の次の言葉を待つ。だがその言葉は、セリアだけでなくサラまでをも震撼させた。

「オゾンが減ってるんだ」

「何ですって！？」

「南極の辺りを中心に、オゾンに穴が開いてる。あれは今も広がりに続けてるから、そのうち全部なくなっちゃうぜ。これは俺の推測だが、南極周辺にはもうオゾンは無いだろうな」

「そんな馬鹿な！」

カーネルの口から飛び出た言葉に、サラが何よりも過敏に反応した。動揺するのも無理はない。この星もオゾンも、彼女が作ったものだ。

「オゾンの層がなければ生物は生きていけない！ それに、オゾンを破壊するなんて一体どうやって……！」

「ああ。これも俺の推測だが、人間の野郎が何か開発しやがったんだ。それがオゾンの破壊に繋がった」

「人間は、気付いているのかしら」

「気付いてるだろうな。で、オゾン破壊を止める為の何かをまた開発してるに違いないぜ」

「……何てこと……！ 人間は、オゾンの崩壊を自らの手で止められると考えているというのですか……！」

常に冷静なサラが、彼女らしくなく感情をむき出しにしていた。机があったらこぶしを打ち付けそうだし、椅子があれば蹴り飛ばしてしまいそうだ。その顔には、怒りと腹立たしさがはっきりと表れていた。

「サラ、何とかならないの？」

方法があります、とまだ怒りの治まらぬ表情で続ける。

「ですが、議会の承認がなければ力を使うことは出来ません。もち

ろん、あの議会は承知しないでしょね……ああ、お姉様には申し訳ありませんが、今私は人間が憎くてたまらない！」

「きつと」

誰よりも切なそうな声に、サラがはっと顔を上げる。自分なんかよりもずっと、この人の心が傷ついている。

「皆、あなたのように……私たちの知らないところで、あなたのような痛みを感じ続けてきたのね……地球のために力を使って、それを人間に悉く無駄にされて……だから皆、あんなことを言ったんだわ……」

「……いけませんお姉様！ 申し訳ありませんでした、あれは私の戯言です！ 私たちが人間を見捨ててはいけませんのに！」

「分かっていてよ」

自分の肩をゆすった妹の手を握り、微笑みながらそっと下ろす。

その完全に動揺しきった瞳を、温かく見つめてやる。

大切なたった一人の妹は、頭もいいし何でも出来る。姉の自分のことを、自分自身よりもずっと大切にしてくれる、とても優しい子だ。ただ、少し自分のことを責めがちである。ちよつとしたことで直ぐ自分を責めてしまうのは、時に自分自身を追い詰めるだけの刃ではない。

「大丈夫……大丈夫。私も、あなたも、カーネルも、人間を見捨てたりしないわ。確かにあなたの言う通り、議会は承認してくれないかもしれない。でもこれは私たちの予想ではないもの。私たちは、議会にこの現状を伝えて、承認してくれるよう訴えることは出来るわ。まだ出来ることは残されているのに、見捨てたりするものですか。大丈夫、大丈夫よ」

「はい……」

その温かい笑顔にほっとする。思えば、自分は小さい頃からずっとこの人の笑顔に支えられてきた気がする。そして今もまた。やはり、自分にとってこの人は無くてはならない存在だ。何故なら、そっと握り締められたその手は、とても温かかったから。

それから約一ヶ月もの期間をかけて、二人はようやく地球の環境変化に関する調査を終えた。アクア達が言っていたことも、情報館で見つけたあの情報も、そのすべてが真実だったことに力を落とし、何度も止めようと思ったが、その度にあの声が二人を励ました。

『これいじょう、きをきらないで』

あの願いは、ただの願いではないのかもしれない。

人間たちからの最後の SOS かもしれないと、何度もそう思った。

「ヴィオード様」

一礼して扉を入ってきたのは、もうずっと片腕として働いてくれている従者神族だ。今度の議会用に書類を持ってきてくれたのだらう。

「有難う。今日はこれだけかしら？」

「ええ。……ヴィオード様」

受け取ってチェックしようとする、いつになく真剣な顔があった。何だか嫌な予感がする。彼女がこんな顔をするのは久しぶりだ。「どうしたの」

これは単なる噂話なのですが、と前置きをしてから、優秀な片腕はある噂話を主の耳に入れた。それを聞いた瞬間、ヴィオードの瞳が刹那見開かれる。

「それは……本当なの？」

噂話ですから。とだけ残して彼女は去った。

スマイレ色の髪が揺れて、机に両手を突く。その瞳には、強い意志が宿っていた。

第4輪：知られざる過去の支え

その日の定例議会に、珍しくヴィオードは遅れてきた。誰も理由を聞かなかったが、セリアとサラ以外は全員知っているようにも見えた。会議室に入ってから自分の席に着いても、ヴィオードはその目を閉じたままだった。

「それでは、議会を始めます……が、その前に」

ゆつくりと目が開いたかと思うと、しっかりとセリアを捕らえている。まだ状況がつかめないセリアは軽く首をかしげた。

「セリア・アイオニス。並びに、サラ・アイオニス。あなたたちは違反を犯しましたね」

予想しなかった言葉に、冷たい汗がセリアの喉もとを伝う。分かっていたはずなのに部屋中がどよめき、ヴィオードと二人の顔とを見比べていた。

「どうということかしら」

「隠し通すことは出来ません！」

強い口調でそう言った後、ヴィオードは立ち上がった。そして右手を軽く振ると、いくつかの静止映像が現れる。そのどれもが、二人があ願いの願について調べているときのものだった。情報室で調べているものもあれば、カーネルと一緒にのものまである。

部屋中の視線が、冷たく感じる。

「どうということか、説明してもらいましょう」

そう言って議長がゆつくりと座った後、セリアは立ち上がった。自分たちは悪いことをしたのではない。協力してくれたカーネルの為にも、真実を話さなければ。

「以前、私が議会に提出して保留庫行きになった、人間界、地球区からの願いに関連する『地球の環境変化』について調査をしていました。ですが、私は違反を犯したとは思っていません」

「セリア！ 一体どういうつもりだ！」

こぶしで机を叩き、アクアが立ち上がって怒りを顕わにする。他にも何人かの女神が立ち上がって避難を言った。

「静かに！ セリア、続けなさい」

「保留庫行きになった願いについて議会の承諾なく調べたなら確かに違反です。本当に私が違反を犯したのなら、どんな罪でも背負いましょう。けれど、今回はそうではありません。私は彼女の為にではなく、自分の為に調査を行いました。二ヵ月後にある、能力学問研究会での表彰式ですスピーチの為に」

「……セリア、それは一体どういことなのかしら？ つまり、あなたは……」

「表彰式のスピーチのテーマに、『人間界地球区環境破壊問題』を取り上げます」

そのセリアの発表に、会議室は波打ったように静かになる。セリアは調査を始める時、心に決めていた。自分は願いのために調査するのではなく、自分のスピーチのために調査するのだと。

誰もが次の言葉に迷う中で、再びアクアが口を開く。

「そのようなこと……認められん！ ヴィオード、そうだろう！？ 願いそのものでないとはいえ、内容が酷似している！ 表彰式という重要な場で、そんなスピーチをするつもりか？」

「お言葉だけどアクア、私はスピーチのことを知ったとき、テーマは『何でも構わない』と聞いたわ。偶然保留庫行きになった願いと同じ内容が含まれているだけで、取り上げるのは地球の環境問題全般。何ら問題は無いと思うのだけれど」

「確かに」

宥めるようにヴィオードが立ち上がり、セリアに言い聞かせる。

「あなたの言う通り、テーマは何でも構わないわ。それにね、もしあの願いが、あなた以外の人の提出したものだったなら誰も文句は言わないのよ」

「……どういことなの」

「あなたが議会に願いを提出して、保留庫行きになった時期と、表

彰が決まってスピーチのことを知らされた時期が近すぎるの！ 実際に城の中では、あなたたちが議会に抵抗して、自分たちだけで願いを叶えるために無断で調査を行ったという根も葉もない噂が流れているわ」

「そんな……嘘でしょう!？」

「本当よ。今は城内に止まっているからまだ噂話だと笑って済むけれど、これが学会の耳に入って御覧なさい。あなたたちが表彰式でのスピーチの為にしたことが、その表彰を取り消してしまうことになるかもしれないのよ？ あなたたちの女神としての資格だって、剥奪されるかもしれないわ。そんなことになったら、あなたたち一体どうするつもり？ 神王様にどんな顔を会わせるといの？ アクアも私も、それを心配しているのよ。サンダーのところのカーネルだって」

ぴく、と、ずっと腕組みをして黙っていたサンダーが反応する。

「精霊としての資格を剥奪されてしまう恐れがあるのを承知であなたたちを手伝ったのでしようけれど、彼だけの問題じゃ済まないわ。監督者責任としてサンダーにも責任が問われるのよ。……セリア、あなたたちがしようとしていることはそういうことなの。あなたたちにそのつもりがなくても、周囲にはそう取られてしまう可能性が高すぎるのよ。まだ表彰式まで二ヶ月あるわ。お願いだからテーマを考え直して」

「……そんな……」

他に新しい願いもないまま、議会は解散した。執務室に戻るセリアとサラの姿には影が落ちていて、自分たちの考えが如何に甘かったかを思い知らされた気がしてならなかった。

執務室にノックが響いたのは、その日の深夜のことだった。
「入るわよ、セリア」

机に伏せていた顔を上げると、そこには優しい顔があった。エメルドグリーンの、肩のやや下ほどまでしかない、女神にしては短い髪の前にはウェーブがかかっている。

「昼間のこと、まだ気にしているのね」

「ウィル……」

苦笑を浮かべた「風」を司る神であるウィル・レンティは、机の横の大きな窓から外を見た。それから振り返り、優しく微笑む。

「……私は、自分が間違っていないと信じてきたわ……」

その笑顔に、セリアはぽつりぽつりと口を開いた。

「女神として、すべての世界を……すべての人々を幸せにするために生まれてきたのよ。そのためなら、どんな犠牲だって厭わないって、皆そうしてきたんだって、ずっと思ってきた。……でも、今回のことで、それは理想の形でしかないことが分かってしまった……だってそうでしょう？ 私たちがいくら人々を幸せにしようと頑張ったって、それを何とも思わない、それを一瞬で壊してしまう人々がいる……それによって仲間達が傷ついて、本来の女神としての役割を忘れてしまっている……こんな悲しい現実、私は知りたくなかった……！ こんなことなら、表彰なんて受けなければ良かった……いえ、違うわ……私が……神王も女神も生まれなければ良かったのよ。そうしたら、こんな悲しいこと、起こらなかった……」

「セリア！」

左頬に痛みを感じて、ふと我に返る。一体今、自分は何を言っていたのだろう。何をしていたのだろう。そのすべてを、消したくなる衝動に駆られる。

「目を覚まさない！ あなたは私のようになってはいけないわ」「えっ……」

ウィルの言葉に、すべてが止まる。ウィルのように、なってはいけない？

「私もね、昔、今のあなたと同じ立場だったのよ」

同じ立場、とは、どういうことなのだろう。どういうこと？ と

聞く前に、苦笑いを浮かべて話してくれた。

「あれは……そう、やっぱり、私があなたくらいの歳の頃よ。あれは別の世界から来た願いだったけれど、その世界も今の人間界と同じような状態だったのね。議会で審議にかけられて、同じように保留庫行きになった」

予想外の話に呆気にとられているセリアを見て、再び微笑む。

「私も何度も抗議したのよ。それでやっとの思いで、審議を通過しそうになったの」

でも。と視線を落とした先輩女神の表情は、悔しさに満ち溢れていた。

「それを見事にひっくり返す出来事が起きたの」

「それ、って……」

「戦争よ」

「戦、争……？」

本当、あの時はしてやられたわ。と無理に笑おうとするウィルを見て、不意に何かがこみ上げる。何かを口にしようとしたが、今はまだ続きを聞くとときだ。

「別に、この世界に被害が及ぶようなものじゃなかったんだけどね。単なる民族同士の戦争だったんだけど、それが見事なまでに辛うじて残ってるものをすべて壊してしまったのよ。願いは保留庫にも戻されず、破棄処分になってその日のうちに破棄されたわ。消えていく光を見ているとき、何とも言えず悔しかった……」

ふと、脳裏にあの願いが蘇る。もしかしたら、あの願いもそうなっていたかもしれない。

「それだけじゃないわ」

どうということかとウィルを向いたとき、そこにいたのは見たこともないウィルだった。辛いような、悲しいような、でも腹立たしくて、悔しくて、自分が情けない。そんな気持ちが全部その表情に表れていた。

「後に議会は、その世界の抹消を決めたのよ」

世界の抹消。

「抹……消……？」

その言葉が、セリアの中に重くのしかかる。議会が世界を抹消したなんて聞いたことがなかった。もちろん、過去の記録にもそんなことは載っていなかった。

「議会はそれを決定した後、公表せずに極秘で抹消を行ったわ……作業としては、その世界をコピーしたような小さな光を神王が両手で潰したただけだったけれどね。光が手の中に吸い込まれて、潰されていく瞬間、私は沢山の声を聞いた気がしたわ……」

「……声……？」

「その世界の、人々の声」

そう言って、首を何度か振った。

「私たちは光が消えたのを見ただけだったけど、実際にあの世界の人たちはどうだったのか……それを考えると、今でも恐ろしくてたまらないの」

その様を想像してしまって、とてつもない恐怖感に襲われる。それに拍車をかけたのが、いくらその立場にいるからとはいえ、抹消を行った自分の父の存在だった。

もしかしたら人間界も、父によって抹消されていたのかもしれない。

そう考えると、心の底から震えが襲ってきた。そんなセリアを見て、ウィルが謝った。

「ごめんなさいね。あなたの親は神王だったのに」

「そんなこと……！ そんなこと、全然、構わないわ。それよりも……」

その後を察して、彼女は続ける。

「小さい子もいたでしょうし、やっと病が治った人もいたかもしれない。その人たちの未来があの一瞬ですべて奪い去られてしまったの。何も気付かぬまま、当然埋葬だってされぬまま、罪の無い人までがその命を奪われたのよ。それだけじゃない、議会はその世界の

ことについて何も記録を残そうとしなかった！ あの世界の名前すらよ？ ……私も、抹消からしばらくして記憶の隠蔽を受けたわ」

「記憶の、隠蔽ですって！？」

「ええ、そう。あの世界に関するすべての情報を隠蔽されたの。でも私は自力で思い出した。深く深くに術者によって沈められた忌々しいあの記憶を、自分の手で取り戻したの。もちろん、思い出したことは誰にも言っていないわ。今あなたに言ったのが初めてよ」

誰にも、という言葉に反応すると、大丈夫、大丈夫、と苦笑して手を振った。

「あなたが誰かに話すとは思ってないし、話すなど言うつもりもないわ。それはあなたが決めることだもの」

それよりも、と、いつもの笑顔になった。

「なぜ環境問題をテーマにしたの？ 批判が来るかもしれないことくらい、想像できたでしょうに」

「ええ、覚悟はしていたつもりよ。でも……昼間はああ言ったけれど、本当はどうにかしてあの願いを叶えたかったの。だって、皆の言うことは変だったもの。……でもね、万一のこともあるから、自分で降りて確かめてみたの。確かに、皆の言う通り、環境の変化はすべて人間の手によるものだわ。でも、砂漠の隅に私は見たの！

人々が木を植えるその姿を！ 植えるけれど、植えても、植えても、もう育たない環境になってしまっているから木が育たないの！ 私たちが力を貸さなければ、彼らも植えるのを止めてしまうわ！ まだ綺麗な心を持つ人がすぐそこに沢山いるのに、手を貸せないなんて……私悔しかったの。それで、表彰式で地球の環境問題について取り上げれば、学会が興味を示してくれるかもしれないって。そうしたら、議会だってむぎむぎ保留庫に放置しておくことなんて出来ないでしょう？ だから、それを狙っていたのだけど……」

同じ経験を持つ先輩女神は、それなら。とセリアに歩み寄り、その肩に手を置いた。

「あなたは私のようになってはいけないわ。あなたはテーマを変え

ずにスピーチを完成させなさい」

「えっ……でも議会は……」

「明日緊急議会を開きましょう。私が援護してあげるわ」

そう言って、ぱちりとウインクして見せた。

「ウィル……援護って、一体どうやって……」

「私のような悔しい思いをするのは、私一人で十分。それに、あなたのその気持ち。決して忘れてはいけないわよ」

セリアが頷くと、再度微笑みを見せてからウィルは帰っていった。扉が閉まった後、ついさっきまで彼女がいた窓に駆け寄る。

まさかあのウィルに、そんな過去があったなんて。皆から慕われて、優秀で、とても頼りになる彼女が過去にそんなことを経験したなど、誰が想像するだろう。

ウィルのために、カーネルのために、サラのために、何より地球のために。

セリアはテーマを変更しない決意をした。

翌日、ウィルの言った通り緊急の議会が開かれた。セリアたちが中に入ったときの視線は良いものではなかったが、それでもセリアはウィルを、自分を信じた。

議長であるヴィオードが席に着き、緊急議会が始まった。

「今日は、ウィルからの申請による緊急議会です。ウィル、一体どうしたの？」

「ええ」

立ち上がる姿に、セリアは膝の上にこぶしを作った。

「昨日の、セリアのスピーチのことなんだけれど」

途端に、部屋の中が騒がしくなる。それをヴィオードが静めて、どうということなの？ と尋ねた。

「私、昨日セリアのスピーチ原稿の下書きを読んだの」

「何ですって!？」

捨てたはずの下書きを読んでいたなんて! でも一体どうやって驚いてセリアが立ち上がる。ウィルが、悪気はなかったのよ、とすまなさそうに謝った。

「従者神族が皆出払っていたから、自分でゴミを回収所に持っていたの。そうしたら、セリア。あなたのスピーチ原稿が捨ててあったものだから」

ほら、と、しわだらけになっている紙を取り出して見せた。セリアも確認するが、確かに自分が捨てたスピーチ原稿だった。

「執務室に帰って読んでみたけれど、別に昨日皆が言っていたような、誰かに影響が出るようなことは全然書いてなかったわ。ただ、セルパティオの絶滅と、地球での多くの生き物の絶滅を合わせ、数々の環境問題について述べていただけよ。何なら、ヴィオード、アクア。あなたたち読んでみたら?」

ウィルに笑顔で渡されては、読まないわけにはいかない。まずヴィオードが目を通し、アクアの手に渡る。二人とも何も言い返さないので見て、他の女神も動揺を始めた。

「せっかくセリアとサラが一ヶ月をかけて調べたのよ? それを中身も見ないで駄目だと決め付けてしまうのは可哀相だと思うの。現に、ね? 何も問題はなかったでしょう?」

その問いかけに、ヴィオードもアクアも黙って頷いた。

「それに、これも見て欲しいの」

ぱちん、と指を鳴らすと、いくつかの映像が映し出された。一つには砂漠の隅で木を植え続ける人々、一つには油まみれの鳥を保護する人々、一つには、絶滅危惧種を保護して繁殖させようと生涯を捧げる人々……海の汚染物質を必死で除去しようとする人々や、山を切り開いてのニュータウン開発に反対運動を起こす人々の姿もある。

「確かに人間たちは、私たちを悉く裏切ってきたわ。この瞬間にだって、数々の自然が汚染されているかもしれない。でも、彼らを見

て？ 人間たちの中にも、今ある自然を守ろうとする人々はこんなにいるの。これは私が見つけたただだから、もっともっと沢山の人がいると思うわ。そんな人々の想いを、私たち女神が踏みにじってもいいのかしら。むしろ、それを伝えようとするセリアの今回の行動は、評価されるべきだと思うのよ。……ねえ。スピーチ、認めてあげましょうよ」

セリアが、サラが、他の女神が。固唾を吞んで見守る中で、ヴィオードは口を開いた。

「……私たちは、いつのまに女神としての心持ちを忘れていたのかしら。自らが傷つくのを恐れて逃げるような真似……。セリア、この下書きをもう一度推敲するなり、清書するなりして、表彰式のスピーチにしないさい。この内容なら、誰にも迷惑はかからないでしょう。……あなたもいいわね、アクア？」

「確かにこの内容であれば、姉上に影響が及ぶ心配もない。……セリア、昨日はすまなかった」

「……いいえ！ こちらこそ、二人とも昨日は有難う。あれで一度、目が覚めたわ。私、とびきりのスピーチをするわね」

本当に議会が承知した！ その嬉しさのあまり、セリアはアクアとヴィオードのもとへ駆け出していた。部屋中が拍手で溢れる中、二人と手を握り、下書きが返される。

「お礼なら、ウィルに言いなさい。彼女がゴミを捨てに行かなかったら、こんなことはなかったわ」

その通りだ。恐らくウィルは、読んだ後すぐに下界へ降り、この映像を撮ってきてくれたのだろう。

もちろん、と、微笑んで手を叩いているウィルのほうへ駆け寄った。

「ウィル、本当に有難う」

「いいのよ。表彰式、頑張ってね」

歓声と拍手の中を自分の席に戻ると、サラが今にも泣き出しそうな顔をしていた。いつにないその様子に、何故か笑みがこぼれる。

「ちょっと、ちょっと、サラったらどうしたの？」

「だって……お姉様のスピーチが認められたんですもの。私嬉しくて……」

「ああもうサラったら」

そんなサラに部屋中から笑みがこぼれ、本格的に泣き出さないうちに、と、議会は解散された。次々と女神たちが去っていく中で、安心した表情のアクアが一人、まだ席に残っていた。

「……アクア」

「姉上！」

妹同じく、そう表情を崩さないサンダーは黙ってアクアの隣に座り、微笑んでそっと頭を撫でた。かつて遠い昔、二人が女神になる前にそうしていたように。

「有難う、アクア」

「……姉上……」

厳しい口調と態度から弱音など全く吐かないと思われている姉妹の、本当は人一倍姉想いな妹が、あの議会の後、女神になって初めて姉の胸で泣いたのは、二人しか知らない秘密である。

セリアとサラが執務室に戻ると、サラが泣いているのに従者神族たちは驚愕した。議会で何かあったのかと口々に尋ねてくるが、泣いているところを見られて少しバツの悪いサラはそそくさと机に戻ってしまった。それを見て、従者神族達は不思議そうに首を傾げ、セリアは微笑みながらくすくすと笑う。

「サラはね、スピーチのテーマが再審で認められたのに感動して泣いているのよ」

「セリア様のスピーチ、認められたんですか！」

「うわあ、本当におめでとうございます！」

昨日の議会后、落胆した二人を見ていた従者神族たちは心から祝福した。中には泣き出したり、歓喜して叫ぶ者もいたくらいで、まるで受賞したときみたいね。とセリアは笑った。

「有難う、皆。さあ、これで後は表彰式まで一直線ね！」

「はい！」

何十回もの推敲を経て、セリアがスピーチを完成させたのは表彰式の二週間前だった。

推敲には、サラとウィルだけでなくアクアやサンウェスト、ヴィオードにサンダーなど、数々の先輩女神たちが手を貸してくれた。

表現の工夫に内容の順番など、様々な第三者の目から見れば変えるべき箇所は沢山あったし、学会表彰式でのスピーチということもあって皆がいつも以上に力を入れたため、予想以上に時間がかかってしまったのだ。

「後は、本番でどう読むかだけだわ。いくら文章が良くても、読み手が気持ちを込めなければ聞き手には何も伝わらないもの」

頑張りなさい、と先輩女神が肩に手を置いて、手を握ってくれたことで、セリアの中には様々な想いと勇気があふれてくる。

「はい。私、頑張ります」

自分には頼りになる先輩たちがこんなに沢山いる。皆が、支え、見守ってくれている。

怖いものなど、何もなかった。

草原は、今日も様々な花をつけていた。

「皆元気そうね」

久しぶりにセリアはこの草原を訪れた。スピーチが決まってから、全く顔を出していなかったのだ。

水面に映る雲は変わらずのんびりとしているし、木陰で休む小鳥たちは楽しそうだ。何も変わっていないことに安心する。

そんな小鳥たちと遊ぶ、一人の青年の姿を見てセリアは微笑んだ。駆け寄ろうとして、彼に近づく別の男に気が付き、そばにあったもう一つの木の陰に隠れた。

「……あんた、誰？」

近付く足音に顔をあげて、予想した人物と違ったのに青年は不服
そうな顔を上げた。男はそれに、困ったように笑う。

「そんな顔をしないでくれないか。将来娘を任せることになるかも
しれないというので、挨拶に来たのだよ」

その言葉の意味に少ししてから気付いた青年は慌てて立ち上がった。
驚いたのは彼だけでなく、セリアも同じだ。長いマントを引き
ずった白髪の、オールバックとも角刈りとも言える髪形のその男の
正体は……

「あっ……神王様!？」

「うん、まあそうだね」

片眼鏡の向こうで、微笑んだ顔にしわがよる。だが、まあまあ。
そう硬くならんでくれたまえ。と笑って手を振る姿は、とても想像
していた神王の姿ではない。本人を目の前にしながら、青年は、精
霊区にいる気さくなお爺さん精霊を思い出していた。

「サンダーのところに仕えている、カーネル・ジェイド・サンダー
君だね?」

「は、はいっ」

「まあ、君も座るといい」

ゆっくりと腰を下ろした神王は、寄ってくる小鳥たちに微笑んだ。
おずおずと隣に座りながらも、本物だろうかと少し疑う精霊の青年
を見て、苦笑する。

「偽者だと思ukai?」

「あっ、いえ、そういうことじゃな……じゃなくて、そういうこと
ではなくて」

「はっはっはっ、普通に話してくれて構わんよ」

「は……はい……」

神王というのは、もっと偉そうで、いつも御殿の椅子に座って左
右に美女を侍らせ、団扇なんかを扇がせたりしているものだと思っ
ていた。だから精霊王がいくら立派な方だと言っても信用ならなか
ったのだが、今隣にいるのは決してそんな王ではない。のんびりし

た口調といい、どちらかというと、休みに縁側で日向ぼっこをするお爺さんのようだ。

「しかし、外に出るのは気持ちが良いもんだね。何千年ぶりだろう」「そんなにですか!？」

「そうなんだよ。セリアたちが子供のときは、外で遊ばせるのに毎日ついて来ていたけれどね。二人が女神になってしまっただけからは、仕事に追われる毎日に逆戻り。窓から空を見る事だって少なかったし……うん、陽に当たるのはやっぱり気持ちが良いね」

その言葉に裏はなく、ただ純粹に日向ぼっこを楽しんでいるように見えた。そんな神王が庶民臭くて、つい笑みがこぼれてしまう。

「ここはいいですよ。小鳥は飛ぶし、花は咲き乱れるし、雲ものんびりしてるし、空はあんなに高い。陽もキラキラ照るわけじゃないし、日光浴にはちょうどいいところですね」

「おっ。分かるかい君も？ そうなんだよ、この……うむ、これは何と言うのかな」

「……『ぽかぽか』、ですか？」

「そうだよ、『ぽかぽか』だ。このぽかぽかした感じが良いんだよ。うん……なるほど、だからなのかな」

「何がです?」

微笑んで出来た顔のしわを更に増やして、その人は笑った。見る者を笑顔にさせる彼の笑顔は、どこかで見たことがある。

「いやね、こんなぽかぽかしたところでセリアもサラも育ったから、二人とも『ぽかぽか』になったんだと思ってね。君も、『ぽかぽか』が好きなんだろう？ だから君はセリアに惹かれたんだね」

そんなことはない、と言いかけて、その言葉を戻す。確かにそうだ、自分は彼女の温かい笑顔に惹かれて好きになった。そしてさっきの神王の笑顔は、彼女の笑顔と同じだ。

「そうですね……」

スピーチのことを知らせようと思って待ち合わせしたのだが、そんなことはどうでもよくなってしまった。きっと、カーネルも同じ

気持ちだろう。踵を返し、夢幻城へと戻る。恐らく今、顔は凄いいことになっているだろう。満面を超えた笑みが浮かんでいるはずだ。

城に戻る前に、この顔が元に戻りますように。

そう願って、一步一步ゆっくりと歩いた。

「……しかし、待ち合わせをしていたのかね？」

「はい？」

「いやね、精霊区を訪ねたらここだと言うから来たのだけれど、セリアと待ち合わせだったのかと思ってね。だったら悪いことをした、突然すまなかったね」

いえ、とんでもない！ 慌てて手を振って、大丈夫ですからと微笑んだ。

「ここは気持ちが良いから、時々来ているんです。それだけですよ」
「そうかい？　ならいいんだが……」

すまなさそうな顔になっていた神王は、笑顔に戻った。それを見て、カーネルも近くにあるもう一本の木に目をやる。

あの木の後ろに、今は誰もいない。

今日は、もうそれでいい。

それからしばらくの間、神王の従者神族が、突然執務室を抜け出した主を見つげに来るまで、二人は小鳥と戯れたり、色々な話をし過ぎて過ごした。

「君になら、娘を任せられそうだよ」

従者神族に引き摺られながらの神王の最後の言葉は、彼の表情と共に今もカーネルの心に残っている。

セリアが神王に育てられていて、本当に良かった。

初めて、心の底からそう思えた。

「何か良いことでもあったのですか？」

そうサラに問われてドキリとする。どうやら顔は戻ってくれなか

つたらしい。

「ええ、ちよつとね」

私たちには教えてくれても良いのではないですか？ と、従者神族たちと執務室でじゃれているその時。セリアもサラム、まだ誰も何も知らなかった。

カーネルも去って誰もいなくなったその美しい草原に、少し埃臭い風が流れ始めていたことを……。

第5輪：恐れていた事態

そしてその日はやってきた。

大きな会場は数え切れないほどの神族と精霊族、その他、神羅界に住む者たちの殆どが集まって、すっかり狭くなっていた。

「やっぱり凄い人ね！ 緊張してきちゃった！」

「サンウェスト、どうしてあなたが緊張するのよ。一番緊張しているのはセリア……のはずなのよ？」

控え室には、推敲に協力してくれた女神たちが、何とかセリアの緊張を解そうと集まったが、本人は人事のようにリラックスしていた。何故か、隣のサラのほうが緊張している。

「ねえ……アクアと、サンダーは？」

集まった女神の中に、二人の姿がないのに気付いてセリアが問う。皆が一瞬動揺したかに見えたが、大したことじゃないわよ。とセリシアが言う。

「ちょっと、下界で小さなトラブルがあってね。精霊の同伴について行ってるの。スピーチまでには帰ってくるわよ」

「そう……」

あの二人が精霊の同伴？ 何かひっかかったが、ヴィオードが口を開いたのでそちらを向く。

「もうすぐ始まるわ……それじゃ、私たちは席に戻るわね」

「頑張るのよ」

「それではお姉様、会場で」

「ええ。有難う、皆」

仲間を見送って、目の前に置かれた、綺麗に飾りの付いた原稿を見つめた。

今日これを読むことで、皆の人間界に対する気持ちが変わればいい。そしてあの女の子の願いも、保留庫から出されて叶えられれば

いい。

『これいじょう、きをきらないで』

脳裏に蘇った願いは、女神に最後の勇気を与えた。

司会者の言葉と盛大な拍手で、セリアは舞台へと上がった。上から照らすライトが眩しい。一瞬緊張が襲ってきたが、溢れかえる拍手がそれを解してくれる。

客席に一礼して、舞台の上に用意された椅子に座った。同じ舞台の反対側には、学会長や学会役員に並んで、父の神王が座っていた。目が合って、温かい微笑みを交わす。再び客席に目を戻すと、一番前に仲間の女神と神族役員達、隣に精霊王と精霊族の役員、そしてカーネルが座っているのが見えた。サラときたら、カーネルの隣で少し不服そうだ。

「それでは、能力学問研究会・表彰式を始めます。最初に、能力学問研究会会長よりご挨拶が……」

午前に始まった表彰式は、精霊族出身の会長の挨拶に始まり、神王、精霊王の式辞に続いて、昼近くになってようやく受賞作品の発表に入った。その間、会場から出て行くような人は誰一人おらず、皆が皆きちんと姿勢を正して話に聞き入っているのにセリアは少し驚いてしまった。

「今回の表彰は、神羅界暦で三十一年ぶりとなります」

そんなに！？ 思わずそう言いそうになるのを何とか抑える。

「それでは、会長より表彰についてお話を頂きます」

再び壇上に上がった、頭部が輝く会長は満足そうに口を開いた。ライトが眩しかったのはこの所為だったのかしら。式の長さから、つい不謹慎なことを考えてしまう。

「今回、セリア・アイオニス氏により提出されたこの『セルパティオ再現記録』は、今まで多くの女神が数々の絶滅種を再現してまいりましたが、その中でも最も表彰に値するものです。まず、セルパティオの種子の構築要素については、夢幻城の資料館に資料がありました。ですが、それらは太古の昔に失われた言葉、それらは古代アルソア語で書かれていたため、解読が不可能でした。しかし彼女は、それをすべて解読し、見事にセルパティオを再現して見せました。この点こそが、表彰を決めた一番の点であります。さて、私はまだ現役でありました頃は……」

受賞者の褒め方は非常に上手かったのだが、残念ながら彼の話は寄り道が好きだった。自らの若い頃の数々の活躍をセリアの話よりも長く述べてから、ようやく元に戻る。

「また、我々が彼女の提出した記録の通り、幻里界にセルパティオを移植したところ、見事に繁殖を始めました。これにより幻里界の人々は笑顔と、希望を取り戻しました。自らの行いによって他の世界の人々を幸せにすることは、女神にとって何よりのこと。よってここにセリア・アイオニス氏の表彰を発表致します」

話が終わると同時に、会場中から拍手が沸いた。恐らくこの半分以上は、話に耐えた自分に対しての拍手に違いない。一番前だというのに、うつらうつらしかけていたカーネルを見ながらそう思った。

「お待たせ致しました。トロフィーの贈呈です」

立ち上がって一礼し、壇上の前に進み出る。トロフィーを持ってやって来た会長はとても笑顔だ。ライトが、眩しい。

「おめでとう」

「有難うございます」

ゆつくりとトロフィーを受け取ると同時に、客席から割れるような拍手が起こった。腕の中の輝くトロフィーを見て、思わず涙ぐみそうになる。

「続いて、表彰状の贈呈です」

持ったままのトロフィーをどうしようか迷っていると、後ろに控えていたのだろう、従者神族が一時預かってくれた。預けて再び前を見ると、そこには表彰状を持って微笑む父の姿。

「……おめでとう」

「有難うございます」

かみ締めるようにそう言った父の言葉を、胸に刻みつけてから返事を返す。受け取った表彰状には、大きく自分の名前が書いてあった。

「皆様、盛大な拍手をお送りください」

既に割れんばかりの拍手が鳴っているというのに、司会者はまだ拍手を求めた。隣でトロフィーを持ってくれている従者神族をふと見ると、覚えのある金髪。

「あなた……ツェラじゃないの！ どうしてここに？」

小声で問うと、涙ぐみながら彼女は答えた。

「私は神王様の従者神族でございます、セリア様。神王様が図らってくださいって、表彰式の間、セリア様のお手伝いをさせていたいただいております」

来たばかりで迷っていた自分を、セリアは身分も関係なく助けてくれた。それがただ純粹に嬉しくて、いつか御礼をしなければとずっと考えていた。それに神王が気付き、今日の大役を与えてくれたのだという。

表彰状を渡した場所で手を叩いている父を見上げ、セリアはとても誇らしく、そして嬉しくなった。

やがて、拍手が少しずつ小さくなり、セリアとツェラ、神王も席へと戻った。

「それでは、受賞者であるセリア・アイオニス氏より、受賞の言葉を頂きます」

原稿を持ち、立ち上がって一礼してから壇上に上る。舞台の上の、更に壇上からだと、会場中が見渡せる。

とうとう、このときが来たのだ。

そう思うと、まだ読んでもいないのに妙な達成感に襲われて、いけない。しっかりしなければと、気付かれないように軽く首を振った。

原稿を開き、マイクに一步步み寄る。

「この度は……」

その時だった。

「緊急警報発令！ 緊急警報発令！ 汚染度がランクAに達しています！」

会場がざわつき、客席も舞台上も総立ちになる。

「緊急警報発令！ 緊急警報発令！ 汚染度がランクAに達しています！」

二度目の警報だ。誤作動ではない。

「皆さん落ち着いて！ 座ってください！」

司会が何度も呼びかけて、やっと会場は静まった。それでも、客席のあちらこちらから、まだ囁きが聞こえてくる。

神王のほうを向くと、父は黙って頷いた。頷きで返し、原稿をその場において客席へと駆け下りる。

「セリア！」

「女神たちよ！」

セリアに駆け寄った女神が彼女の名前を呼ぶのと、神王が女神を呼んだのは、ほぼ同時だった。穏やかだった顔が、威厳ある神王の顔に戻っている。

「夢幻城へ戻り、即、事実関係の調査を！」

「はい！」

会場から飛び出した女神たちは、地を蹴って空へと飛んだ。いつもの何倍にも速度を上げ、夢幻城の警報管理塔を目指す。その表情は、どれも真剣なものだった。

「神羅界の大气が、驚異的な速度で汚染されています」

「何ですって!？」

警報管理塔では、神羅界始まって以来の事態に多くの神族が目まぐるしく動きまわっていた。それもそうだ、過去に警報が発令されたのは遥か昔に夢幻城での小火騒ぎ一度きりしかない。ましてや、神羅界の環境が汚染されているなんてことは決して有り得ないことだった。

「どういふことなのか、説明してちょうだい」

「汚染物質の流入先は現在調査中ですが、下界で爆発的な環境汚染が発生した模様です。それによって、その世界が汚染物質を抱えきれず、連絡通路を通じて逆流したものと思われます」

「それが何故ランクAにまで達するの!？」　すぐに通路を閉じればいいことでしょう?」

「汚染物質の流入の勢いが強すぎて通路を閉じることができないのです!　それに、この広がりようから推察すると、汚染物質は以前から少しずつ流入していたことも考えられます」

「そんな……!」

ヴィオードと管理神族のやりとりは、信じられないことばかりだ。はっとして、セリアは塔から飛び出た。草原の上を飛び、ある場所で降り立つ。青く澄んでいたはずの空は灰色に雲って、小鳥の囀りもなければ雲も忙しく動いている。楽園であったはずの草原に咲く花々は枯れ、木々までもが腐り、水は濁って魚が浮いていた。この間まで楽しそうに飛び回っていた小鳥はあちらこちらで命を落としている。

地獄と化した草原の上に膝から崩れ落ちて、一度は蘇ったはずの花を手のひらで包む。美しかった花びらは灰色に染まり、撫でると砂のように風に溶けた。

ただ呆然として、何も考えられなかった。

それだけではない。神羅界中を包む腐りかけた大気、この臭いは嗅いだことがある。あの時はくしゃみが出る程度だったが、今では花を枯らし、皆が和んだこの場所を死の世界に変えてしまった。

信じたくない。あくまでも私の予想でしかないじゃない。

「お姉様！」

降り立った妹の声に顔を上げる。周りを見回して顔を思いつきり歪めてから、妹は動けない姉の肩を抱えて体を起こした。

「お姉様、お気持ちは分かりますが、しっかりしてください！ 今こそ我々女神の力が必要なのですよ！」

「ええ……そうね、そうだわ」

頭を振り、自分を取り戻そうとする。自分がしっかりしなくては。自分は女神だ。

すべての世界を幸せにする責任がある。

それは、神羅界も例外ではない。

「お姉様、どうか落ち着いて聞いてください」

サラは、セリアが出て行ってからのことを手短に話した。他の世界に影響が出ることのないように、他の世界への通路はすべて閉じてあること。まだ他の世界に影響は出ていないこと。また、広大な神羅界のうち、精霊区と東の海洋区は立ち入りに禁止になっていること。そして、セリアが予想したことも。

「汚染の原因は、人間界……地球区であることが判明しました」
深夜のウィルの話が脳裏を過ぎる。

恐れていたことが、起きてしまった。

第6輪：女神

セリアとサラが地球に降りると、そこにはサンダーとアクアの姿があった。

「セリア……」

「……いったい、何が起きているの……？」

「戦争だ」

戦争。世界の抹消。

そんな言葉が浮かび、慌てて振り消そうと頭を振る。

「大規模な戦争なの？」

「世界全体を巻き込むほど大きいとは言えないが、決して小さいとも言えないだろう。数多くある国の一つを、いくつかの国が警告と称して攻撃している。被害状況は……」

失われたアクアの言葉の先を、マーキュア姉妹の無言の誘導で、アイオニス姉妹はその目で見た。

巻き上がる粉塵、噴煙。

上空から 空を飛ぶ鉄の塊が爆弾を落とす。

その度に悲鳴を上げて逃げ惑う人々。

腕を 足を 頭を失った死体。

声を 心を 命を失った死体。

その 未来を失った 幼い 死体。

声にならない悲鳴を上げて、セリアはその場に崩れ落ちた。体中が震えて、もう何も信じられない。辛うじて立っているサラも、その残酷な光景に顔を背けた。

「どうして……どうしてこんなことに……っ」

あふれ出る涙で声にならない。喉の奥から絞り出して、恐らく表彰式の間ずっとここにいたのであろう二人の言葉を待った。

「……確かに、この世界は完全に腐ったわけではなかった。砂漠の端では人々が幾度枯れても木を植え続けていたし、油にまみれた鳥を助ける人々もいた。それを我々は自らの目で確かめた。……確かめて、表彰式に帰ろうとした時だ。陸から噴煙が起こり、そこから大量の汚染物質が破壊的速度で溢れ出したのだ。通路付近にいた我々は何とか跳ね返そうとしたが、汚染物質はそんな我々の結界をも突き破ってしまった。もう、この星が抱えきれなかったのだろう。汚染物質の量が、この星の許容量を越えてしまったのだ」

サラの体が、細かい震えに襲われる。

「そんな馬鹿な……空間許容量は、そう簡単に超えられるものではないのに……」

「サラに落ち度はない。人間が愚かで……その加減が我々の予測を超えただけだ」

「しかし……!」

「それに」

アクアでなく、サンダーが口を開いたのにそちらを向く。彼女らしくなく、顔が屈辱に歪んでいた。

「今回ここから流出した汚染物質は、人間たちの悲鳴が半数を占めている。『無念だ』……『死にたくない』……『なぜ自分がこんな目に』……。命を落とした人間たちの憎悪や怨念が、これまでの分も積もり積もって汚染物質化し、溢れ出たんだろう」

「……それじゃあ……!」

「その通りだ。戦争を止めても、戦争を仕掛けた国が自らの罪を認め、命を落とした人々を悔やみ、弔わない限り、汚染物質の流出は止まらない。だが戦争において、そんなことは有り得ない」

次々と突きつけられる事実、またしても自分を見失いそうになる。

世界の抹消。

振り払ったはずの言葉が、再び脳裏に蘇る。

「それで、神羅界のほうはどうなっている?」

「神羅界は……環境汚染度がランクAに達し、精霊区と東の海洋区は立ち入り禁止地区に指定されました」

「何だと!？」

「セリア!」

アクアがセリアの腕をつかんで引き起こし、瞳をまっすぐに見つめる。セリアにはその意味が分かった。今は、神羅界に戻って神王の指示を待たねばならない。

「神羅界に……戻りましょう」

次々と溢れる、憎悪や怨念で作られた汚染物質を背に、四人の女神は一先ず神羅界へ飛び去った。

管理塔に戻ると、既にそこに女神たちの姿はなかった。

「セリア様、サラ様、サンダー様、アクア様。他の女神様は既に発たれました。アクア様、サンダー様は西地区へ向かってください。

セリア様とサラ様は、会議室でヴィオード様がお待ちです」

「承知」

それを聞いたサンダーとアクアはすぐに飛び立った。西へと向かう二つの影が、あっという間に見えなくなる。

「ねえ、何故私たちは会議室なの？」

「申し訳ありませんが、詳しくは存じません。ヴィオード様からの言伝です」

この非常時に。と顔を見合わせるが、行かないことには始まらない。管理神族に短く礼を言って、管理塔の階段を駆け降りた。

会議室には、ヴィオードだけでなく、ウィル、「夢」を司る神であるドーラ・エヴァレス、「光」を司る神であるティライト・ハーネスと、彼女の妹である「闇」を司る神のアーク・ハーネスの姿があった。どの女神も髪を一まとめにしている。

「セリア、サラ、よく聞いて」

横からこぼれた髪を耳にかけて、ヴィオードは言う。

「私たちはこれから地球へ向かいます。戦争の終結と、汚染物質の除去を目的に。あなたたちも一緒に来なさい」

戦争は終結するだろうか。終結したとしても、汚染物質は止まらないかもしれない。もしそうだったら、地球も抹消処分を受けてしまうのだろうか。自分も、サラも、隠蔽を受けねばなくなるのだろうか。

不安の溢れは止まらなかったが、セリアは無言で、髪で髪を結った。自分が動かなければ、自分がしなければ、今は誰も、何も信じられそうにない。目を閉じて、あの願いを思い出す。

『これいじょう、きをきらないで』

大丈夫よ、私に任せて。あなたの願いは、必ず叶えてみせる。目を開けて、頼りになる仲間を見つめた。

だって私には、こんなに頼りになる仲間がいるんだもの。

「セリア・アイオニス。その任、確かに請け賜りました」

力強い言葉に、他の女神も安心した。続いてサラも任を請ける。

彼女はもともと髪を束ねているので束ねなおす必要はない。

「それじゃあ、準備はいいわね」

ヴィオードの言葉に皆が頷く。それに彼女も頷いて、降りた後の行動について殴り書きされた紙を折って端に置いた。任を請けた女神たちはヴィオードを先頭に一番近いバルコニーまで出ると、次々に床を蹴って、未だ汚染物質の溢れ出る通路口へと飛んだ。近付いていくにつれ、空の色もだんだん黒くなってくる。

大丈夫、大丈夫。

自分に言い聞かせていると、隣を飛んでいたサラが手を握ってくれた。その手は、すれ違う風と違って温かい。

大丈夫、大丈夫。

「二人とも、通路に入るわよ」

ヴィオードの言葉に、顔を合わせていたのを前に向ける。目の前には、今にも女神たちを飲み込んでしまいそうな闇が大きく口を開けていた。

長い通路を抜けてすぐ、打ち合わせ通りに女神たちは分かれた。

「源」を司るヴィオードと「光」を司るティライト、そして「星」を司るサラは、戦争で被害を受けた人々のもとへ飛んだ。

「皆さん。戦とは、悪しき人の心が生み出すもの。良いですか、決して相手を憎んではなりません……」

「神様……私たちをお助けください……」

「ご安心なさい。戦はすぐに終わります……」

「どうぞ、楽にしてください。すぐに治しますからね」

「ああ神様……有難うございます」

「喋らないで、そのまま、そのままですよ」

女神の中で一番の治療力を持つヴィオードが治療をし、治療術を学んでいるサラがそれを手伝う。治療の終わった者や待っている者にはティライトが心持ちについて話をする。光の力を持つ彼女の話には、人々は多くの涙を流した。その涙から、人々の心の悪しき部分と一緒に流れていくのを女神たちは感じていた。

一方、豪華なホテルの一室には「闇」を司るアークと「夢」を司るドーラがいた。

「うーん……んん」

ベッドで満面の笑みを浮かべていた男は、どうやら欲にまみれた夢を見ているようだ。

「ドーラ、頼む」

男の頭部にかざしていた右手に力を入れると、手のひらから光が

溢れてあたりを包み込んだ。

『ハーツハツハツ、酒だ、もっと酒を持ってこいー！』

豪華な部屋の中で周りに美女を侍らせた男は、顔を真っ赤にして酒を追加した。すっかり変態オヤジが出来上がっている。

『どうしたー？ ……つく。酒はまだかー？』

『お待たせ致しました』

酒の乗った盆を持った美女が二人、すうっと歩み出る。顔の上半分に布をかけていて、妖艶な雰囲気、男はすっかり上機嫌だ。

『んー……ふっふっ、お前たちいい女だなあー……つく。よし、何か望みはないか？ 今の俺に敵はないー！ 何でも遠慮せずに言ってみろお！ ……つく』

『何でも、でございますか？』

『うむ。……つく。今の俺はなあ、A国の大統領なんだあー！』

俺の国はなあ、世界で一番発展している、いっちゃん偉い国なんだ！ ……つく。何て言ったって、先進国に一番近い発展途上国を集めた国だからなあ！』

『それは素晴らしい！ 一体どうやって？』

突然入り込んできた二人の女に席を取られ、他の女性はやや不服そう。

『決まってるじゃないか、力だよ、ち・か・ら！ ……つく。どの国のお偉いさんも、うちの軍隊にや敵わないのさ、つくう。ちよつと飲みすぎたかな』

『まあ凄い！ お強いね』

『当たたり前だ！ けどなあ、B国の大統領が俺のやり方を間違ってる！ って批判しやがるんだ！ あそこはまだ本当に発展途上中だから僻んでやがるんだ、つく。だから俺は思い知らせてやったのさ！ 俺に逆らったらどうなるかをなあーっはっはっ！』

『そうですか。では、色々と教えてくださったお礼に、私も教えて差し上げましょう』

『……あ？』

美女が立ち上がり、一人が手を一振りすると、豪華な部屋も、美女たちも、酒も消えた。それと同時に、酔っていたはずの男の酔いも醒める。辺りを見回して、何もない闇の世界に包まれているのに怯え、立ち上がって慌てさまよった。

『どこだ……ここはどこなんだっ！？』

『あなたの夢の中ですよ』

ビクツとして振り向くと、黒髪の女性と濃紫の髪の女性が立っていた。二人の後ろからは、光が射している。

『誰だ……誰だっ？』

『……愚かな』

『ひいっ！』

黒髪の女性が手を伸ばすと、触れてもいないのに男の首が絞まる。それも、死なない程度に、意識を失わない程度に力が加減されている。ただでさえ恐ろしいこの状況に、彼女の闇の力で恐ろしさは増幅する。

『ぐっ……ふうっ』

『足掻いても無駄ですよ。ここは夢の世界。私の思うがままの世界です』

『愚かな権力者よ……今お前が味わっている痛みは、お前が戦を仕掛けた先の国の犠牲者が味わったものに比べれば何てことはないわ！ 己の罪を自覚し、生涯をかけて償うがいい！』

触れられてもいないのに絞まる首に必死に手を伸ばしながら、男は膝から崩れた。目の前にいる二人は何者なんだろう。薄れかけては戻ってくる意識の中で必死に思い出そうと試みるが、全く思いつかない。

『あなたたちは……一体……っぐう』

黒髪の女性は伸ばした手をまっすぐ上に上げて、男と視線を合わせた。

『とことん愚かな男よ……神に向かって何を言う』

神。その言葉に男は目を見張る。

『神……様……!?!?』

『神の許に誓いなさい。目が覚めたら戦を終わらせ、あなたが力によって手に入れた国々を元のように戻すと。そしてあなたが仕掛けた戦で命を落とし、身体を失い、多くの悲しみを背負わねばならない人々に、一生をかけて償いなさい!』

『二度と同じことは繰り返すな。さもなくば、お前の大切なものをすべて奪い去ることになる。それでも構わぬか!』

振り上げていた手を横に振り、同時に男も倒れる。首を押さえてむせ、二人の女神に向かって頭を床に擦り付けた。目からは涙が溢れ出ている。

『女神様……! どうぞお許しください、女神様のおっしゃる通りにお誓い致します!』
『ですから、どうか息子だけは、息子だけはお助けください……!』

女神は顔を見合せて、頷く。

『誓うのだな』

『もちろんです! お誓い致します、ですからどうか……!』

何か、とても恐ろしい夢を見た気がする。息があがっていて、体中汗でびっしょりだ。ゆっくり起き上がって息を整えようと深呼吸するが、体の震えが止まらない。

夢だ。あれは悪い夢だったのだ。神なんて、いるはずがない。

そう自分を信じ込ませようと必死になってみるが、どうにも息が整わない。恐る恐る首に手をやると、何かに絞められた痕があった。

「うわああー!」

「どうなさいました!?!」

悲鳴をあげて、ベッドから転げ落ちて暴れまわる。扉の前にいた警備員が慌てて駆け込んできたのに、物凄い剣幕でしがみついた。

「おいっ、この部屋に誰も入っていないだろうなっ!?!」

「あっ、はい! 何人たりとも入れておりません!」

「本当だっ!？」

「本当ですっ」

ずるずると崩れ落ちた主を見て、警備員は慌てて敬礼して出て行った。床に手を突き、一層震えの強まった手で再度喉を押さえる。

「……あれは、夢じゃないというのか……」

何度も滑りながら電話に飛びついて、必死に秘書に電話をかけた。番号が上手く押せなくて、何度も間違える。

「おい……ああ、私だ。今すぐB国に出ている軍に撤退を言い渡せ! 戦争は終わりだ! それから、大臣たちを集めておけ、国の解体を行う……何、夜だから皆寝ているだど? そんなもの、叩き起こせばいいだろう! 叩き起こして集めておけ、いいなっ?」

乱暴に受話器を置いて、ふっと息をつく。一先ずはこれでいいはずだ。

『決して誓いを忘れるな』

「ひいっ!」

あの黒髪の女神の声が聞こえた気がして周囲を探すが、誰もいない。再度深く息をついて、大急ぎでクローゼットからスーツを取り出した。

そんな男を窓の外から見ながら、二人の女神は顔を見合わせる。

「ちよっとやりすぎたかしら」

「私には足りんくらいだな。……ここはもういいだろう。サラの応援に行かねば」

「ええ」

微笑んで、正義の黒い女神たちは被害国へと飛び去った。

「準備はいいかしら、セリア?」

「ええ……大丈夫よ」

「風」を司るウィルと「花」を司るセリアは、地球一広い海洋である太平洋の遥か上空にいた。

二人の仕事は汚れた大気を浄化すること。セリアの頭部に生まれつきある大きな花びらのようなものは、本来息を吹きかけて細かく散らし、枯れた花を再び蘇らせることに使うのだが、浄化作用も持ち合わせているため、風に溶かせば大気を、水に溶かせば水を浄化することができる。その力とウィルの風を組み合わせて、地球を丸ごと浄化してしまおうというわけだ。

花びらは全部で三枚あるが、一枚は神羅界の浄化に残しておかねばならない。チャンスは、たった二回だ。

目を閉じ、数々のことを思い出しながらセリアは一枚目を抜いた。砂漠の隅で木を植え続けた人々、油にまみれた鳥を洗って放していた人々、絶滅しかけている生物を必死で保護した人々……この世界は、まだ悪しき力で完全に覆われたわけではない。

一枚で、十分足りる。

「封じられし清き力よ……我の名の元に楔を抜き、悪しき力を葬り去れ！」

そう唱えて最初一枚を放つと、ウィルが風を呼び寄せて包み、溶かして地球中に運んでいく。風が通ると海や大地は色を変え、まるで二人を中心に虹色の波紋が広がっているようだった。

虹の波紋はゆっくりと、それでも確実に広がっていく。が、残りあと少しのところで速度がぐんと落ちてしまう。

「後もう少しなのに！」

「……お願い、届いて……！」

女神の願いが届いたのか、しばらく停滞していた虹色の波紋は再び速度を上げる。そして遂に、浄化の波が地球全体を包み込んだ。

「やった……やったわウィル！」

「ええ！ 虹色の波紋なんて……あら？」

やがて虹色が消えると、山から、街から、海から、地球上のあらゆるこちらから、次々と光の球が浮かび上がった。それらはゆっくりと上昇し、二人のもとへ集まってくる。

「綺麗……」

周囲を取り囲む幻想的な光の海に見とれていると、またゆつくりと上昇して二人の上で一つの大きな光になった。温かい光を放つ大きな光の固まりは少しずつ膨らんで、みるみるうちに広い海を覆ってしまふほどの大きさになる。

「あなたは幸せね、セリア」

「えっ？」

「私の失った世界でも……こんな綺麗な光があったのかしら……」
セリアたちの上にある大きな光は、地球中の人々の平和への願いだ。人々の胸の内に封じられていたのが、浄化の力によって溢れ出したに違いない。

「あったわ、きつと……その世界にも、沢山の綺麗な光が」

「……そうよね。きつとあったわね」

もちろん！ と笑って、セリアは両手を高く広げた。

「さあ、地球中の平和への祈りよ。この世界中に広がちなさい！」
セリアの声とともに光は弾け、世界各地へと広がっていく。そして山に、街に、海に、世界中のあちこちに雪のように光を降らせた。ついさっきまで汚れていた星は、今や美しい光で包まれていた。

「うっわあ、綺麗……」

「何これ、雪？」

降り注ぐ光に、人々はうっとり魅せられた。貧民街の子供たちも、木を植え続ける人々も、油にまみれた鳥も、それを助けた人々も。地球上のすべてに光が降り注ぎ、平和への祈りが満ち溢れる。

「ママ、みて！」

女の子が窓に駆け寄り、光の雪に目を輝かせた。一体何？ と駆け寄ってきた母親も、その美しさに息を呑む。

「何て素敵なんでしょう……雪？ 違うわね、一体何かしら」

「かみさまだよ！」

そう言ってぴょんぴょん飛び跳ねた娘は、きらきらと瞳を輝かせ

ている。

「まえにね、かみさまにおねがいしたでしょ？　だからかみさまがきてくれたの！」

「そういえば、そんなこともあったわね」

神様に届いて良かったね。と笑いかけると、うん！　と笑って頷いた。

「でも……」

本当に神がこの世にいるのなら、望みもせずに戦争へ行ったこの子の父親を無事に帰してくれはしないだろうか。

そう、降り注ぐ光に願ってみる。

「ただいまー」

「パパだ！」

「……あなた！？」

玄関に走ると、そこには無事の帰還を待ち望んだ夫の姿。見る限り、どこにも怪我はなさそうだ。

「戦争が終わったよ。突然撤退命令が出てね、緊急帰国さ。この国も、元のように解体されるらしい」

何ヶ月ぶりかの家族揃っての夕食の席で夫は朗報を告げた。どういふ風の吹き回しなんだろうな、と彼が笑うと、未だ興奮冷めやらぬ娘が瞳をきらきらさせる。

「あのね、かみさまなんだよ！」

「神様？」

「前に、神様をお願いしたでしょう？　昼間不思議なことがあったから、神様が来てくれたんだって、はしゃいじゃって」

そう笑いながらも、彼女はさっきまで降っていた光の雪を思い出していた。

もしかしたら、神様は本当にいるのかもしれない。

不思議な現象と奇跡の繋がりを信じたくて、ふと、そんなことを思う。

「ああ、そうか。じゃあ、あれは神様だったのかなあ」

「えっ？」

「いやね、撤退するとき、仮包帯所にいる仲間を迎えに行ったんだ。そうしたら、救命員じゃなくて、凄く綺麗な、格好も全然違う女の人が三人いてね。二人は怪我人を治療してて、一人は人々に何か話してるんだ。後からまた二人現れたんだけど、治療してもらってる人も話を聞いてる人も、皆凄く幸せそうです。でも、一番印象に残ってるのは……」

「……残ってるのは？」

「光り輝いていたことかな。彼女たち、皆、温かい光に満ち溢れていた。……そうか、彼女たちは女神様だったんだね」

「すごい！ パパ、かみさまにあったんだ！」

ああ、神様。本当に有難うございます。あなた方は、私たち人間を見捨ててはいなかった。私たちは、与えていただいたこの星の環境を壊してしまっているというのに。

はしゃぐ夫と娘を見ながら、妻は涙ぐんだ。体の向きを変えて、夕日で朱く染まった空を見つめる。

どうか神様、この子が大人になっても見守っていてください。

私たち大人は道を間違えてばかりだけど、この子たちには未来があります。

どうか、この子達にご加護を。

エピローグ

地球区の浄化から数日後、神羅界は女神たちの浄化力のおかげですっかり元通りになっていた。帰還したセリアが花びらを使うまでもなかったほどだ。東の海洋区と精霊区の立ち入り禁止令も、現在は解除されている。

会議室では、今回の騒動について神王も参加して緊急会議が開かれていた。

「このような騒動を起こした人間界は、以前案の出ていたように抹消するべきである」

神王の言葉に、女神たちはざわついた。セリアやサラ、ウィルの表情も暗くなる。

「しかし」

閉じていた目を開け、やれやれといった表情で首を振った。

「まだ人間界には、清らかな心が溢れている。その心まで抹消してしまうのは、我々神の仕事ではないと思う。これについて、皆の意見を聞きたい」

部屋中が静まり返った中で、アクアが立ち上がり、一礼した。

「私は、今回の騒動が起こるまで、人間たちは皆、悪しき心の塊だと思ってまいりました。しかし、実際はそうではなかった。我々には、神としての自覚が足りなかったのかもしれませんが」

「人間たちを見捨ててはならない」

続いて、サンウェストが立ち上がる。

「何故なら、私たちは女神であるからです」

「女神には、すべての世界を平等に扱う責任があります」
ウォーラも立ち上がった。

「すべての世界を幸せにする責任も」

セリシアが付け足す形で立ち上がる。

「何より」

最後にウィルが立ち上がった。

「それを教えてくれたのはセリアとサラです。こんなに数多い女神の中で、二人だけが本当の女神でした。私たちは、二人の意見に賛同したいと思います」

私も、私もです。部屋中の女神が次々に立ち上がり、まだ腰を下ろしている二人に視線が集まる。

「……それでは、どうだね？ セリア、サラ」

突然のことに驚きながらも、二人は顔を見合わせてから微笑み、立ち上がった。

「私たち皆は女神です」

「まだ未来のある人間界を抹消することは許されません」

神王の隣に座っていたヴィオードに始まり、部屋中から拍手が沸き起こった。神王も、こうなると思った。といった顔で頷く。

「……それでは、人間界は、今しばらく様子を見ることにしよう。環境については、我々が少しずつサポートしていけば良い。皆、それで良いな？」

「はい！」

では解散。との神王の声で議会は解散し、セリアとサラは手を握り合って喜んだ。

地球は、人間界は抹消されなくて済む。

涙を浮かべながら喜んでいると、ヴィオードが笑顔で声をかけた。「セリア。最後の仕事、引き受けてくれるわよね？」

「この辺りかしら」

セリア、サラ、ウィルとヴィオードは再び人間界を訪れていた。すれ違う空気は、もう埃臭くない。

残り二枚の花びらのうちの一枚を、すっと抜いた。

「この世界に、祝福を」

ゆっくりと息を吹きかけると、花びらは粉々に散っていく。薄紅色の温かい光が、静かに広がっていく。

今回の地球区騒動の最後の仕事。それは、女の子の願いを叶えること。

『これいじょう、きをきらないで』

あの願いが人間界を救ったと言っても、過言ではないかもしれない。

「……願いは叶えたわ、小さなお嬢さん。この星の未来は、あなたが自分の力で切り開いていくのよ」

広がっていく温かい光を見つめながら、四人の女神は微笑んだ。

幾年かの月日が経ち、草原は、前以上の美しい姿を取り戻していた。

腐りかけた木々は再びまっすぐに伸び、小鳥たちも元気に囀っている。雲もゆったりと流れているし、花々も幸せそうだ。

そんな中を、一人の女性が歩いていく。青みがかった長い銀色の髪が、風にそっと流れる。頭にある大きな花飾りのようなものは、三枚目がちょうど生えてきたところだ。

ある場所まで来ると女性は膝を折って、その細く美しい手を伸ばした。浄化によって再び咲いた珍しく美しい花を、指でそっと撫でてやる。

その表情には、安堵と、心からの喜びが溢れていた。

しばらくそうした後で立ち上がると、また風が彼女の髪を流す。見上げる空はどこまでも高く、青い。

あの女の子はどうしているだろう。もう学校を卒業して、社会に出て行く頃だろうか。

過ぎる時の速さに苦笑しながらも、変わらないものがあることに

嬉しさを覚える。

どうかこの時が、絶えることのありませんように。

桜の咲く季節に愛しい人との結婚が決まった女神は、心からそう願った。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7207c/>

Oh ! My God !

2010年10月8日15時59分発行